

県道塩江屋島西線道路局部改修工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

竹元遺跡

2006. 11

香川県教育委員会

序 文

竹元遺跡は県道塩江屋島西線道路局部改修工事に伴い発掘調査を行った高松市東植田町大字東植田字竹元に所在する遺跡です。

発掘調査は香川県教育委員会からの委託で、平成8年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施し、平成18年度に香川県埋蔵文化財センターが整理作業を行いました。

竹元遺跡では縄文時代と弥生時代の遺構・遺物が検出されましたが、弥生時代後期中期の集落の縁辺をめぐる溝から多量の弥生土器が出土し、高松平野南部の弥生時代集落のあり方や土器の様相を明らかにし、この地域の歴史をより深く知るための重要な資料となりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県土木部道路建設課及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導を頂きました。ここに深く感謝の意を表すとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年11月

香川県埋蔵文化財センター

所長 渡部 明夫

例　　言

1. 本報告書は、県道塩江屋島西線道路局部改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県高松市東植田町大字東植田字竹元に所在する竹元遺跡（たけもといせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課からの依頼を受け、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

平成8年度

対象面積 1,162m²（実掘面積453m²）
調査期間 平成9年2月1日～平成9年3月31日
調査担当者 森下友子、樋本清輝、三好弘美

4. 発掘調査にあたって、下記の関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部道路建設課、香川県高松土木事務所、地元各自治会

5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

本報告書の執筆・編集は片桐孝治が担当した。

6. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土地標系第IV系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

SK…土坑跡 SD…溝状遺構 SP…柱穴跡 SR…自然流路跡

7. 石器実測図中、現代の欠損は黒く塗りつぶしている。

8. 掘図の一部に国土地理院地形図「高松南部」、「川東」(1/25,000)を使用した。

9. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 1998年度版」による。

目 次

序文

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第2章 立地と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	8
第1節 遺構・遺物について	8
第4章 まとめ	32

挿 図 目 次

第1図 発掘調査地・試掘トレンチ配置図	2
第2図 周辺微地形復元図	6
第3図 遺跡位置図	7
第4図 第I調査区土層断面図	9~10
第5図 第I調査区遺構平面図	11
第6図 SR01~04 出土遺物実測図	12
第7図 SD01 出土遺物実測図	13
第8図 SD02 出土遺物実測図①	15
第9図 SD02 出土遺物実測図②	16
第10図 SD02 出土遺物実測図③	17
第11図 SD03 出土遺物実測図①	19
第12図 SD03 出土遺物実測図②	20
第13図 SD03 出土遺物実測図③	21
第14図 SD03 出土遺物実測図④	22
第15図 第II~IV調査区土層断面図	25~26
第16図 第II調査区遺構平面図	27
第17図 SD04・SK02 土層断面図	28
第18図 SD04 出土遺物実測図	28
第19図 第I・II・IV調査区包含層出土遺物 実測図	31
第20図 遺構変遷図	33~34

表 目 次

第1表 遺物観察表	36~42
-----------------	-------

図 版 目 次

- 図版1 ①調査区遠景（東より）
②調査区近景（南東より）
- 図版2 ①第I調査区 SD02 遺物出土状況
(北西より)
②第I調査区 SD02 遺物出土状況
(南東より)
- 図版3 ①第I調査区 SD02 遺物出土状況拡大
(北西より)
②第I調査区 SD02 遺物出土状況拡大
(東より)
- 図版4 ①第I調査区 第I遺構面完掘状況
(南より)
②第I調査区 第I遺構面完掘状況
(北より)
- 図版5 ①第I調査区 東壁土層（北西より）
②第I調査区 南壁土層（北より）
- 図版6 ①第I調査区 西壁土層（東より）
②第I調査区 第2遺構面完掘状況
(南より)
- 図版7 ①第II-1調査区 第1遺構面完掘状況
(南より)
②第II-2調査区 SD04 土層断面
(南西より)
- 図版8 ①第II-2調査区 第1遺構面完掘状況
(北より)
②第II-2調査区 第1遺構面完掘状況
(南より)
- 図版9 ①第II-2調査区 東壁土層（南西より）
②第II-2調査区 西壁土層（東より）
- 図版10 ①第II-2調査区 SK02 土層断面(南より)
②第II-2調査区 SK02 完掘状況
(北西より)
- 図版11 ①第III調査区 東壁土層断面（北西より）
②第III調査区 完掘状況（北より）
- 図版12 ①第IV調査区 東壁土層（西より）
②第IV調査区 完掘状況（北より）
- 図版13 ①SR01 出土遺物
②SR02・03 出土遺物
- 図版14 SD01・02 出土遺物
- 図版15 SD02・03 出土遺物
- 図版16 SD03 出土遺物（1）
- 図版17 SD03 出土遺物（2）
- 図版18 ①SD03 出土遺物（3）
②包含層出土遺物
- 図版19 SD04・包含層出土遺物

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

香川県教育委員会事務局文化行政課（以下「文化行政課」とする。）は、国道・県道バイパス建設予定地、道路改良予定地内の試掘調査を国庫補助事業として適宜実施することにより、埋蔵文化財の有無等を確認し、適切な保護措置を図ってきた。

県道塩江屋島西線道路改良事業は、塩江町と屋島を結ぶ県道30号線の渋滞緩和のため計画された事業である。高松市新田町、前田西町、十川西町、十川東町など北部から部分的に現道拡幅により2車線化が進められており、南部の東植田町内についても建設工事が進展してきた。文化行政課は東植田町内の事業予定地周辺に弥生時代後期中葉の遺跡である竹元遺跡が隣接して所在すること、南部の丘陵上には八幡馬場先1～3号墳、高様川を挟んで東には下司庵寺跡が所在することから朝倉川から南約500mの範囲については事前に協議が必要だと判断した。

平成5年度には、この範囲内の北辺部において工事が計画され、文化行政課による試掘調査の結果、弥生時代の遺構・遺物を確認し、保護措置が必要となり、この部分については、対象面積が100m²と小面積であったために平成6年2月に文化行政課が発掘調査を実施した。発掘調査の結果、弥生時代の遺構面と縄文時代の遺構面を検出し、弥生時代では堅穴住居跡、大溝跡、土坑跡を、縄文時代では土坑跡を検出した。弥生時代の遺構は全て後期中葉頃のもので、近接して所在する竹元遺跡と同一の集落であることを想定した。

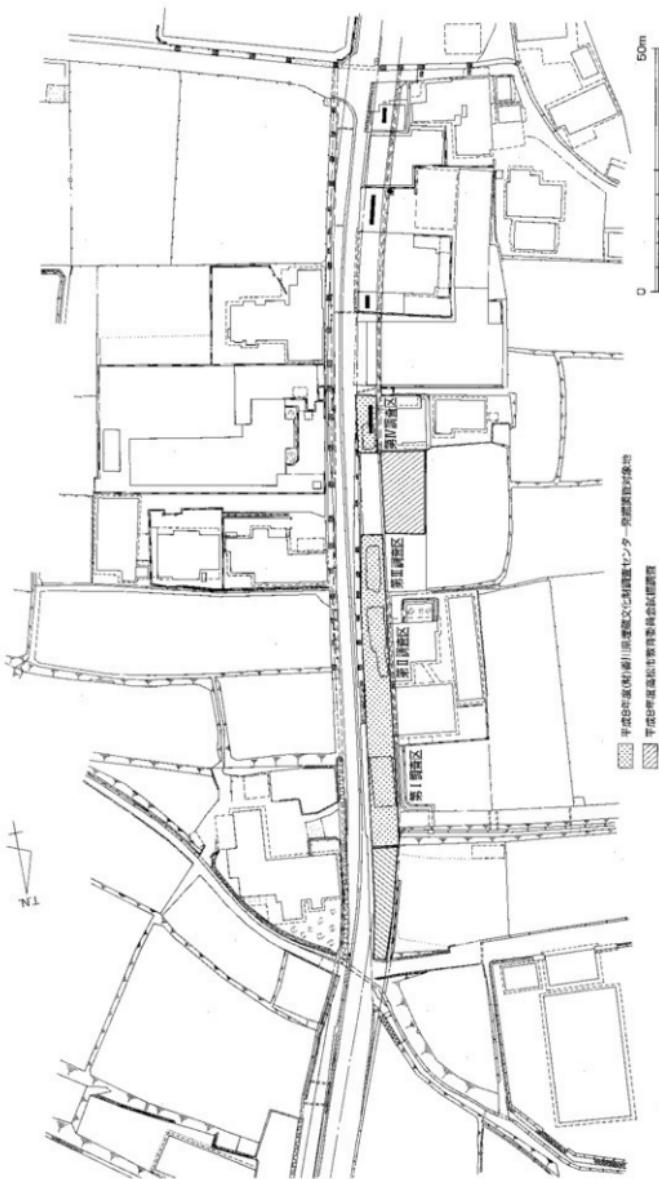
平成6年度には、高松土木事務所から同路線の南延伸部の丘陵上において古墳の有無の確認依頼があり、平成6年12月6日に現地踏査を実施した。その結果、現状では石室・石棺材などは確認できないが、土坑などの所在する可能性があり、事前に試掘調査を実施する必要があると判断した。平成8年度にはほぼ中央部分の試掘調査を実施した（第1図）。その結果、試掘調査対象地の北辺部分（第IV調査区）で、弥生時代後期の土器と縄文時代の土器が出土したことから保護措置が必要と判断した。

以上各年度の発掘調査、試掘調査の結果を基に文化行政課は、香川県土木部道路建設課と協議を行い、その結果東植田町内の朝倉川から南約500mの範囲で、1,162m²について保護措置が必要と判断した。ただし第IV調査区と第III調査区の間は、隣接部分を高松市教育委員会が試掘調査を実施し、地下約2.5mまでの搅乱を確認し、その搅乱が道路建設予定地まで続いていることから調査対象地から除外した。

保護措置が必要となった部分は、平成5年度の発掘調査の結果や調査区東側に近接して周知の埋蔵文化財埋蔵地である「竹元遺跡」が所在することから同一遺跡と判断した。

参考文献

- ・「竹元遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度』香川県教育委員会 1994
- ・『県道塩江屋島西線道路改良工事に伴う埋蔵文化財試掘調査の結果について』香川県教育委員会 1996
- ・「竹元遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』香川県教育委員会 1997
- ・「竹元遺跡」『財團法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成8年度』財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997
- ・「竹元遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成8年度』香川県教育委員会、財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997



第1図 発掘調査地・試掘トレンチ配置図

第2節 調査の経過

竹元遺跡は香川県土木部の「県道塩江屋島西線道路局部改修事業」に先立ち、発掘調査を実施した遺跡である。平成5・6・8年度の3ヵ年に文化行政課が発掘調査・試掘調査を実施した結果、1,162m²が発掘調査対象地となり、平成8年4月1日付けで財団法人香川県埋蔵文化財調査センターと香川県教育委員会との間で締結した「埋蔵文化財調査契約書」に基づき、平成9年2月1日～平成9年3月31日までの2ヶ月間、実掘面積453m²で発掘調査を実施した。

竹元遺跡は部分的に保護措置の不要部分と、店舗や現道のため調査対象外となる部分が計3箇所あり、調査区は4箇所に分かれる。そのためそれぞれの調査地を遺跡範囲内北から第I調査区～第IV調査区と呼称した（第1図）。

発掘調査は直営方式で、第I調査区から開始し、重複させながら第II調査区、第III・IV調査区へと展開した。

第I調査区では、縄文時代～弥生時代にかけての溝状造構・自然流路跡を中心として検出し、第II調査区では弥生時代の溝状造構・土坑跡を検出した。第III・IV調査区では遺構を検出できなかつた。

発掘調査体制は下記のとおりである。

平成8年度

■ 文化行政課

総括	課長	藤原 章夫
	課長補佐	高木 一義
総務	係長	山崎 隆
	主査	星加 宏明
	主任	打越 和美
埋蔵文化財	副主幹	渡部 明夫
	文化財専門員	木下 晴一
	技師	塩崎 誠司

■ 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	大森 忠彦
	次長	小野 義範
総務	係長	前田 和也
	主査	水卜 照代
	主任 主事	西川 大
調査	文化財専門員	森下 友子
	文化財専門員	樋本 清輝
	参事	近藤 和史
	参事	別技 義昭
	調査技術員	三好 弘美

整理作業は調査員1名、臨時職員6名で、平成18年4月1日に開始し、平成18年4月30日に終了した。

整理作業体制は下記のとおりである。

平成18年度

■ 文化行政課

総括	課長	三谷 雄治
	課長補佐	中村 穎信
総務	副主幹	河内 一裕
	主任	脇 悠介
埋蔵文化財	課長補佐	藤好 史郎

■ 香川県埋蔵文化財センター

総括	所長	渡部 明夫
	次長	柳原 正人
総務課	課長	野口 孝一
	主任	鷲田 和司
	主任	田中 千晶

文化財専門員	山下 平重	資料普及課 課長	廣瀬 常雄
文化財専門員	信里 芳紀	文化財専門員	片桐 孝浩
		臨時職員	池内 妙子
			加藤 恵子
			北濱 敏子
			木下 純美
			松崎 千春
			米田 静恵

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

竹元遺跡は高松平野の南東部に所在し、西・南・東の三方を八丁山（632.9m）から北方に蜘蛛の手状に延びる丘陵によって、また北方も低丘陵によって遮られた盆地状地形の南部に位置する。この盆地状地形のはば中央部には南東方向から北西方向に三木町大畑に源をもつ朝倉川が流れる。この朝倉川は現地盤から見ると現河床は7~8m程度の河床低下が確認でき、竹元遺跡は更に4~5mの高所部分にあり、この高所以外は旧の朝倉川の氾濫原と考えられる。旧地形を復元すると朝倉川の氾濫原は北側にかなり広い範囲で確認でき、また南側でも4~5mの段丘崖となり、東西に広い範囲で確認できる（第2図）。

竹元遺跡が立地する位置は八丁山から北方に延びる丘陵の先端部が北東方向に向きを変え、ちょうど朝倉川に平行して延びる丘陵の北側に広がる平坦部で、東西約350m、南北約200mと狭い。

第2節 歴史的環境

竹元遺跡の周辺には、主として弥生時代から古代の遺跡が所在する。

現在確認できる遺跡を時期的に見ると、旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。縄文時代の遺跡は当遺跡で縄文時代晚期の遺構・遺物が出土しているのみである。弥生時代の遺跡は対岸丘陵部上に高柿墳墓群、南部の丘陵上に片山墳墓群が所在する。明確な集落跡としては竹元遺跡のみで、やや下流の青木遺跡・本村遺跡が散布地として確認されているのみである。しかし、朝倉川と春日川が合流する部分の南の丘陵上には墳丘墓が確認されていることから弥生時代終末頃の集落の存在が推定できる。

古墳時代の遺跡は南部の丘陵上に古墳時代後期の古墳である八幡馬場先1~3号墳が近接して所在するのみである。高松平野南部の古墳の分布を見るとやはり朝倉川と新川が合流する部分の西側の丘陵上に、大龜古墳群、本村古墳群を中心に天満池北西古墳、天満池西古墳、尾越古墳などが所在し、古墳密集地となっている。一方竹元遺跡が所在する盆地状地形の平坦地には弥生時代以降、遺跡が希薄である可能性が考えられる。

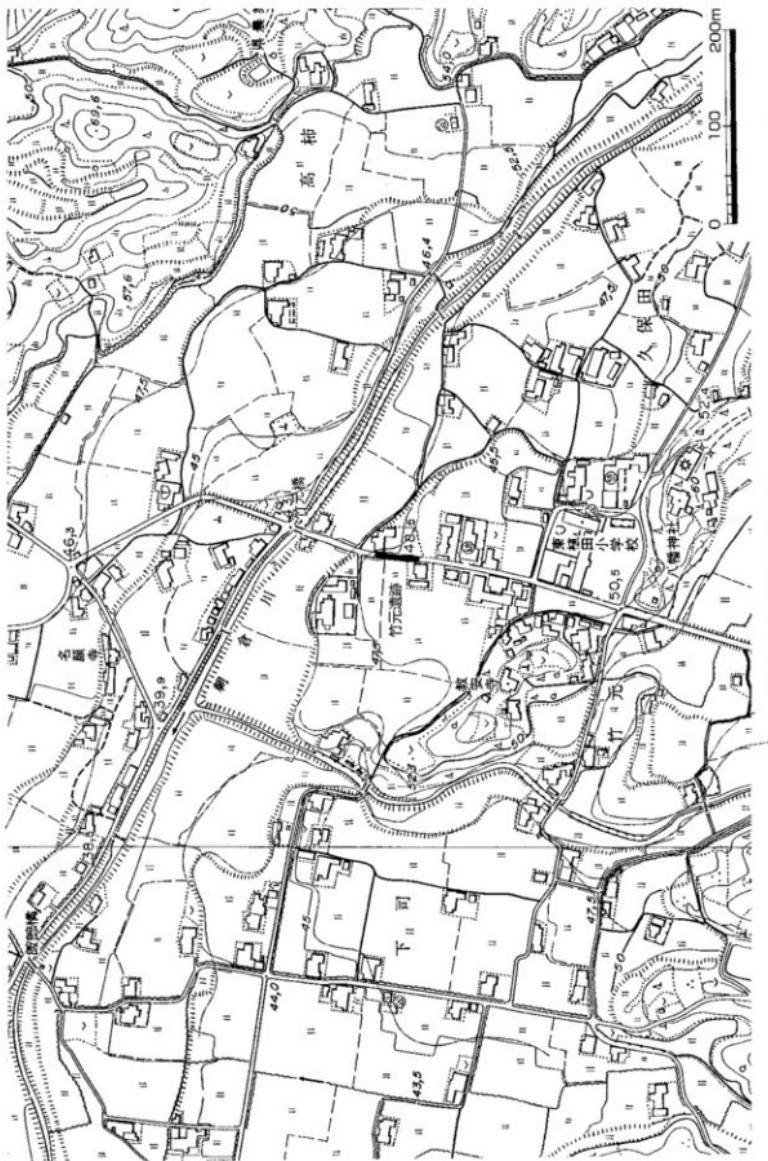
しかし、古代になると竹元遺跡の西にある高様川を挟み、直線距離で約500m西側の平坦地に市指定史跡の古代寺院である下司廐寺が確認されている。下司廐寺についてはこれまでに本格的な発掘調査が実施されておらず、不明な部分が多いが吉光神社から清光神社一帯にかけて古瓦が散布していることや吉光神社の位置が土壇状になっており、花崗岩製の礎石が遺存していることから塔跡と考えられ、この当たりを中心に伽藍が所在すると推定されている。遺物は八葉複弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦が出土している。八葉複弁蓮華文軒丸瓦は、内区に八葉複弁蓮華文、外区に鋸歯文、中房には凸型で（8+1）個の蓮子を配している。これらの瓦はいずれも奈良時代前期のものと考えられる。しかし、現在周辺において同時期の遺構・遺物が確認されていない。

中世では朝倉川上流に戸田城跡、下流に稗田城跡があり、この地域が古代以降重要な地域になっていたものと考えられる。

参考文献

- 「下司廐寺」『香川叢書 考古編』香川県教育委員会 1983

第2図 周辺地形復元図





1 竹元遺跡	17 上佐山山腹古墳	38 青木道跡	54 片山墳墓群	84 公洞公園遺跡
2 上佐山遺跡	18 牛の墓	39 岩破遺跡	55 下司房寺	85 北治古墳
3 住蓮寺池1号墳	19 中山田2号墳	40 青木11号墳	56 八万馬場先1号墳	86 専福寺東塚
4 比沙門堂古墳	20 中山田1号墳	41 勝賀掩寺	57 八万馬場先2号墳	87 南想天満2号墳
5 泊田合子神社古墳	21 王地遺跡	42 本村1号墳	58 八万馬場先3号墳	88 南想天満1号墳
6 本村遺跡	22 板瀬原跡	43 本村2号墳	59 高徳墳墓群	89 南想天満遺跡
7 池田城跡	23 王地遺跡	44 本村3号墳	60~66 公洞池1~9号窯跡	90~92 末次1~3号墳
8 こんぼうじ古墳	24 上代横穴前	45 丸熊遺跡	69 青木13号墳	93 菩谷遺跡
9 天観古墳	25 天満池北西古墳	46 松尾池北古墳	70 青木12号墳	94 古銭出土地
10 五輪塔	26 天満池南古墳	47 本村遺跡	71 御園南部9号墳	95 戸田城跡
11 五輪塔	27 尾越古墳	48 切谷五輪塔	72 今岡古墳	96 空家古墳
12 出之山古墳	28 尾越2号墳	49 切谷遺跡	73~72	97 山野原古墳
13 出之山古墳	29 馬瀬寺跡	50 西橋田二十四塚2号墳	鬼無大塚古墳・平木1~3号墳・ 神高池西古墳・神高池北西古墳・ 神高池南西1、2号墳・古宮古冢	98 山口龍神社古墳
14 出之山古墳	30~35 大鳥1~6号墳	51 五輪塔		
15 包倉地	36 藤田城跡	52 西橋田二十四塚1号墳		
16 上佐大明神古墳	37 藤田東古墳	53 松尾池池の神古墳	83 山の神1号墳	

第3図 遺跡位置図

第3章 調査の成果

第1節 遺構・遺物について

第I調査区

第I調査区は南北に長い調査対象地の北端に位置する調査区で、東西約4.6m、南北約10.2m、調査面積約46.9m²を測る。この調査区は香川県教育委員会文化行政課が平成5年に発掘調査を実施し、弥生時代後期の竪穴住居跡等、縄文時代晚期の土坑跡を検出した調査区の南に隣接する部分に当たる。

発掘調査の結果、第I調査区では第1遺構面と第2遺構面の2面を確認した。

第1遺構面は第4国土層断面（A-A'）で見ると現地表下約0.4m（標高約47.94m）、第11層暗褐色灰色小礫混じり細砂上面で確認している。現地盤から第1遺構面の間には層厚10cm程度の第1～3層灰色系・褐色系の粗砂層・シルト層が堆積する。第1遺構面直上には第3層赤褐色小礫混じり粗砂が堆積し、この層は第II～IV調査区の第1遺構面直上に堆積する灰色系の小礫混じり粗砂層と色調・層厚の点で若干異なるが、同一層と考えられ、第I～IV調査区の第1遺構面上に堆積する土層として基準となる。

第2遺構面は第4国土層断面（A-A'）で見ると第1遺構面下約1.3m（標高約46.60m）、第25層灰褐色小礫混じり粗砂上面で確認している。第1遺構面と第2遺構面の間には第11～16層灰色系・褐色系の細砂・粗砂層が厚く堆積し、これらの層から少量の土器片が出土している。

それぞれの遺構面を形成する基盤層は土質が細砂・粗砂であることから、洪水等による堆積層と考えられ、それぞれの遺構面はその自然環境の変化の中で、安定した時期に形成されたものと考えられる。

第1遺構面で検出した遺構は溝状遺構3条（SD01～03）、柱穴跡6基（SP01～06）で、出土遺物から見ると全て弥生時代後期、第2遺構面で検出した遺構は自然流路跡4条（SR01～04）で、出土遺物から見ると全て縄文時代晚期から弥生時代前期にかけてのものである。

縄文時代から弥生時代前期

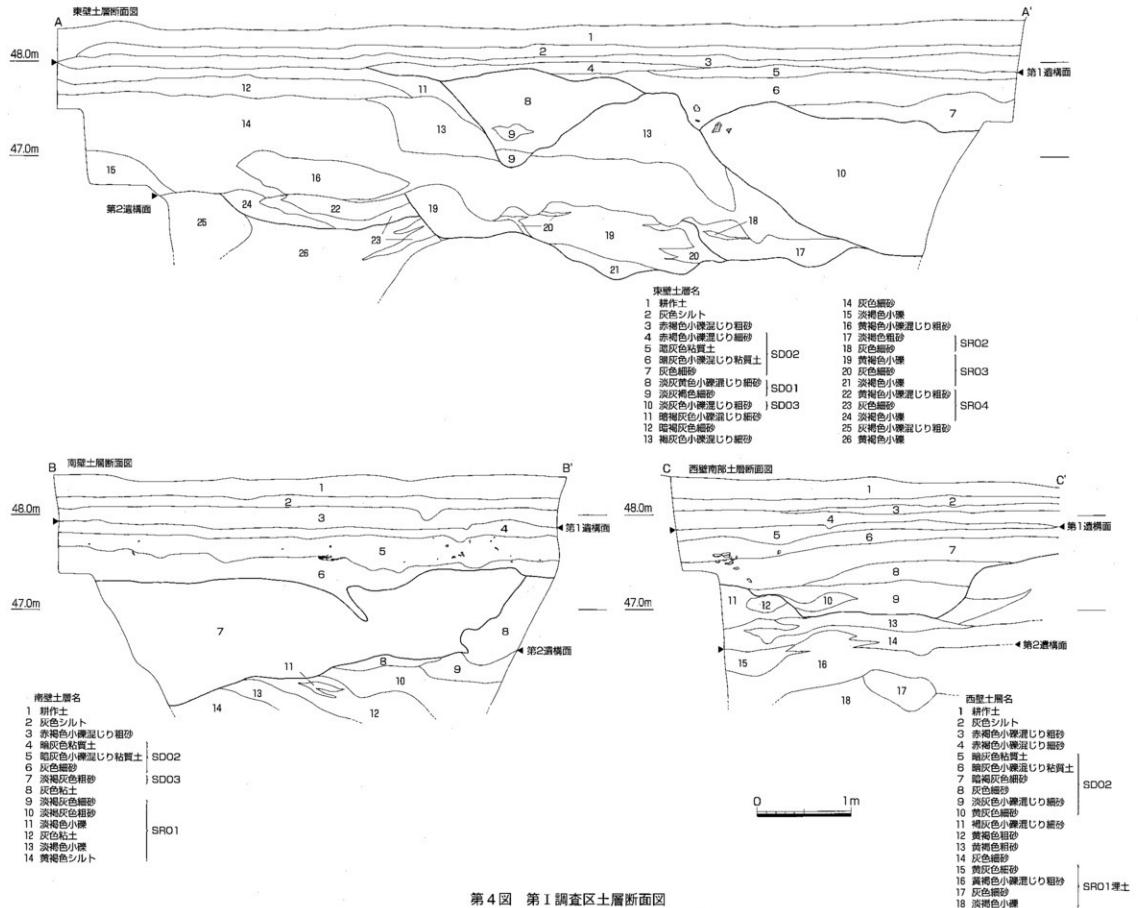
SR01

SR01は第I調査区南部で検出した自然流路跡である。調査区南西隅において流路の一部、湾曲した北側掘り方を検出しているのみで、流路方向・規模等は不明である。自然流路跡内の堆積土は第4国土層断面（B-B'）でみると6層以上で、主として灰色系・褐色系の細砂・粗砂が堆積する。

この自然流路跡からは突帯文系土器、弥生土器、サヌカイト片が少量出土している。

1は弥生土器甕で、体部上半に8条のヘラ引き沈線、その下位にはヘラ先による刺突文が施されている。2は器種不明で、体部外面に逆C字状の爪形文が施されている。3は突帯文系土器深鉢で、頸部が外反しながら上方に延び、口縁端部は方形に終わらせる。口縁部外面、口唇部から約1cmの位置に1条の突帯が貼り付けられている。口唇部には刻み目が、突帯には指先による大き目の刻み目が施され、頸部外面には貝殻条痕が顯著に施されている。

時期は出土遺物から縄文時代晚期から弥生時代前期と考えられる。



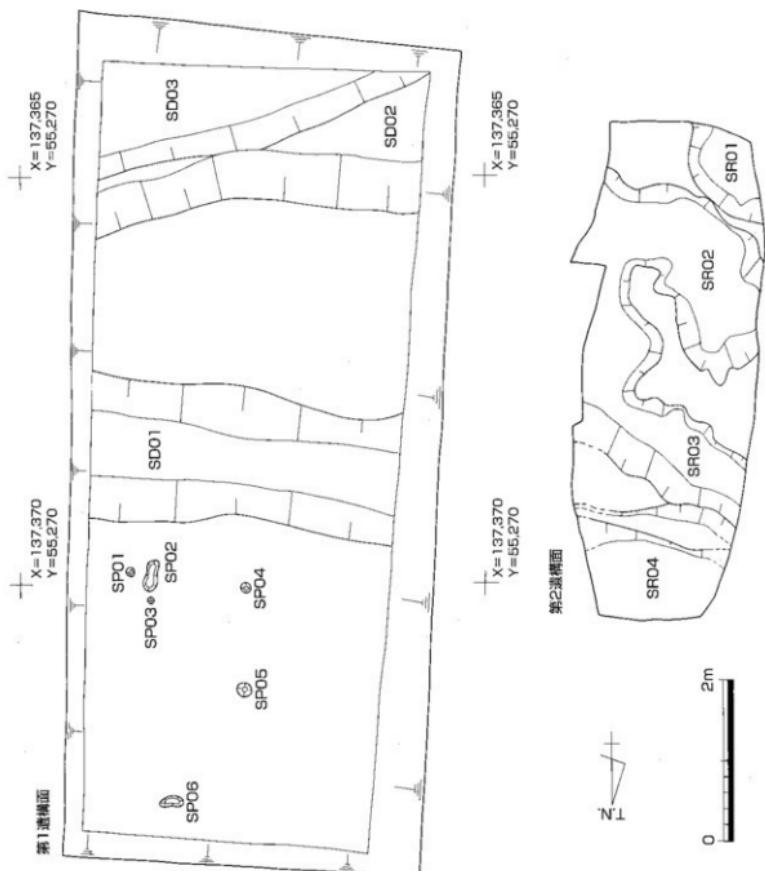
第4図 第1調査区土層断面図

SR02

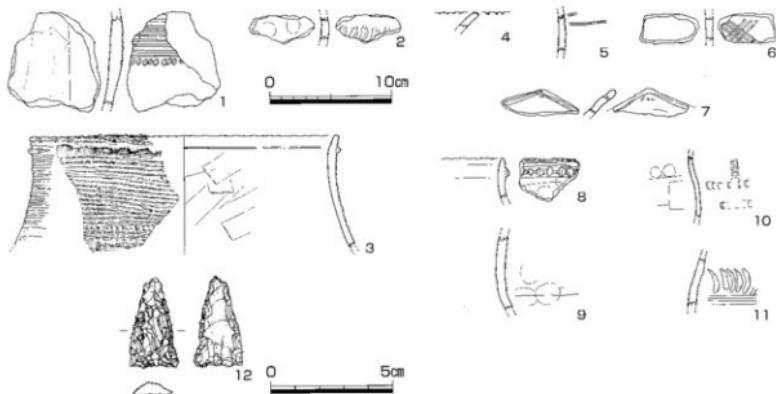
SR02は第I調査区南部で検出した自然流路跡である。第4図土層断面(A-A')をみるとSR03と切り合いが確認でき、SR03を切っていることが解る。流路方向は概ね西-東方向を取るが、かなり蛇行している。規模は最大幅約1.7m、深さ約0.4m、検出長約3.2mを測る。自然流路跡内の堆積土は2層で、第17層淡褐色粗砂を主とした堆積土に部分的に第18層灰色細砂が混じる。自然流路の断面は上部がかなり開く、「U」字状を呈する。

自然流路跡から縄文土器、弥生土器、サヌカイト片が少量出土している。

4は口縁部片で、口唇部に刻み目が施されている。5は弥生土器甕で、体部外面に現存2条のへ



第5図 第I調査区遺構平面図



第6図 SR01～04 出土遺物実測図

ラ描き沈線が認められる。6は体部片で、外面に3条1単位のヘラ描き沈線が、直行するように施されている。7は浅鉢で、波状口縁の頂部に穿孔が施されている。

時期は出土遺物から縄文時代晩期から弥生時代前期と考えられる。

SR03

SR03は第I調査区北部で検出した自然流路跡である。第4図土層断面（A-A'）をみるとSR02・04と切り合いが確認でき、SR02に切られ、SR04を切っていることが解る。流路方向は概ね西北-東南方向を取るが、やや蛇行している。規模は最大幅約1.44m、深さ約0.73m、検出長約3.3mを測る。自然流路跡内の堆積土は3層で、上位に第19層黄褐色小礫を主とした堆積土に部分的に第20層灰色細砂が混じり、下位に第21層淡褐色小礫が堆積する。自然流路の断面は上部がかなり開く、「U」字状を呈する。

自然流路跡から少量の突帯文系土器、サヌカイト片が出土している。

8は突帯文系土器深鉢で、頸部が外反しながら上方に延び、口縁端部は丸く終わらせる。口縁部外面、口唇部から約0.8cmの位置に1条の突帯が貼り付けられている。口唇部及び突帯には刻み目が施されている。10は深鉢で、体部外面及び頸部外面に先端方形の工具によるコ字状の刺突文が施されている。11は器種不明で、頸部外面に逆C字状の爪形文が、その下位に2条の沈線が施されている。

時期は出土遺物から縄文時代晩期から弥生時代前期と考えられる。

SR04

SR04は第I調査区北部で検出した自然流路跡である。第4図土層断面（A-A'）をみるとSR03と切り合いが確認でき、SR03によって切られていることが解る。流路方向は概ね西-東方向を取る。規模は最大幅（現存長）約1.42m、深さ約0.30m、検出長約2.30mを測る。自然流路跡内の堆積土は3層で、第22層黄褐色小礫混じり粗砂、第23層灰色細砂、第24層淡褐色小礫が堆積する。

自然流路の断面は上部がかなり開く、「U」字状を呈する。

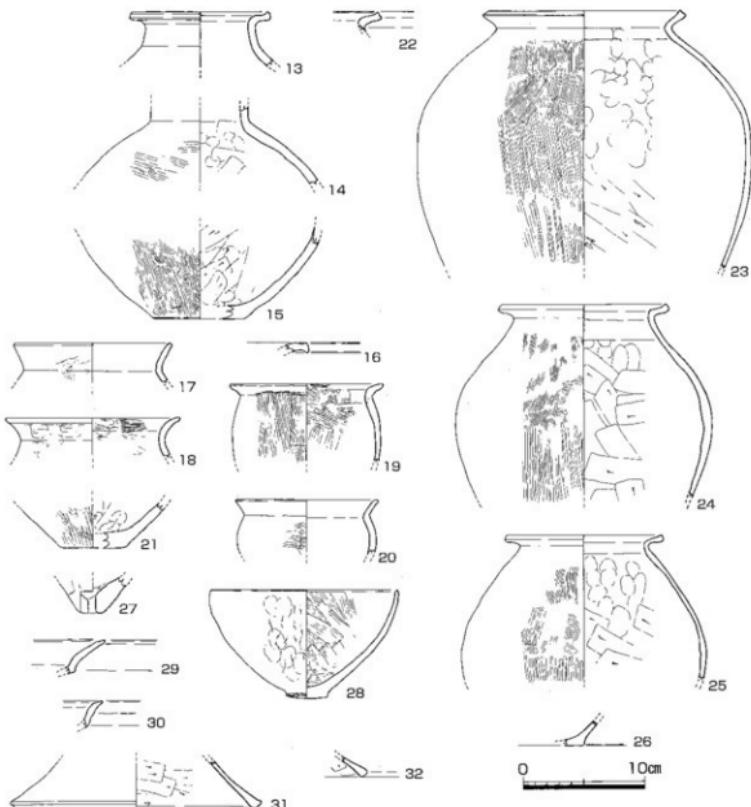
自然流路跡から少量の土器片、サヌカイト片が出土している。

図化可能遺物は、サヌカイト製の石錐（12）のみで、詳細な時期は不明である。ただし土層断面よりSR04の掘削面が他の自然流路跡（SR01～03）と同一の第2遺構面であることを確認している。

弥生時代後期

SD01

SD01は第I調査区中央部で検出した溝状遺構で、SD02・03の北側で検出した。流路方向は東～西方向を取り、SD02とは約2.3mの間隔をあけ、ほぼ併走する。規模は最大幅約22m、深さ約1.07



第7図 SD01 出土遺物実測図

m、検出長約4.0mを測る。溝状遺構内堆積土は土層断面（A-A'）で見ると2層で、主として第8層淡灰黄色小礫混じり細砂が堆積し、第9層淡灰褐色細砂が部分的に混じる。断面は上部が開く、「V」字状を呈している。

溝状遺構内より弥生土器壺・甕・鉢・高坏が出土している。

13~15は壺で、底部が平底を呈し、頭部はやや内頸しながら直線的に上方に延び、口縁部はほぼ水平に屈曲し、口縁端部は上方に短く摘み上げる。体部外面にはハケ目が、内面には下半にヘラ削りが、上半に指頭痕が施されている。壺14の胎土に角閃石を含む。

16~26は甕で、16~21が胎土に角閃石を含まない甕で、22~26が胎土に角閃石を含む甕である。角閃石を含まない甕は全体にやや小振りで、頭部が緩やかに屈曲するものと明瞭な稜を持ち屈曲するものが認められるが、全て口縁端部はそのまま終わらせており、調整も含めてかなり共通する部分が認められる。角閃石を含む甕は頭部内面に1cm程度の上下方向の平坦面を持ち、外側は「く」の字に屈曲する。口縁端部は若干上方に摘み上げる。体部外面下半には縱方向のヘラ磨きが、上半には縱方向のハケ目が施され、体部内面には下半にヘラ削りが、上半に指ナデ、指頭痕が施されている。体部最大径の位置が個体によって若干上下するものの形態・調整が共通しており、全て下川津B類土器と考えられる。

27は甕、28は鉢、29~32は高坏である。

高坏は口縁部がやや外反しながら外上方に延び、口縁端部内面に凹線状の諂みを持つ。脚部は直線的に外方に延び、端部は方形に終わらせる。脚部内面には横方向のヘラ削りが顕著に施されている。残存部分に穿孔は確認できなかった。高坏30~32の胎土に角閃石を含む。

胎土に角閃石を含む土器の全体の割合は約9.5%である。

出土遺物より時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

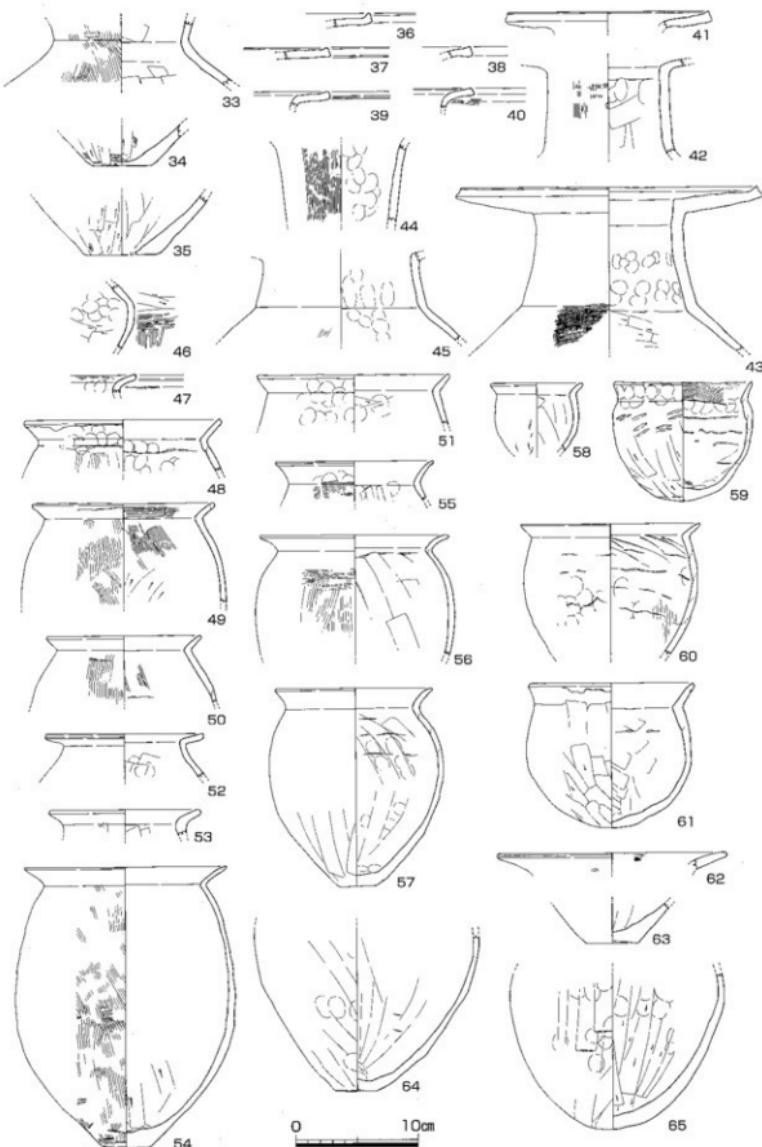
SD02

SD02は第I調査区南部で検出した溝状遺構で、北側の掘り方は検出しているが、南側の掘り方は調査区外に延びており、確認していない。SD03と切りあい関係が確認でき、SD02がSD03を切る。流路方向は概ね東-西方向を取る。規模は最大幅（土層断面による現存長）約6.9m、深さ約0.65m、検出長約4.0mを測る。溝状遺構内堆積土は土層断面（A-A'）で見ると4層で、第4層が赤褐色小礫混じり細砂、第5層が暗灰色粘質土、第6層が暗灰色小礫混じり粘質土、第7層が灰色細砂である。断面は浅い「U」字状を呈している。

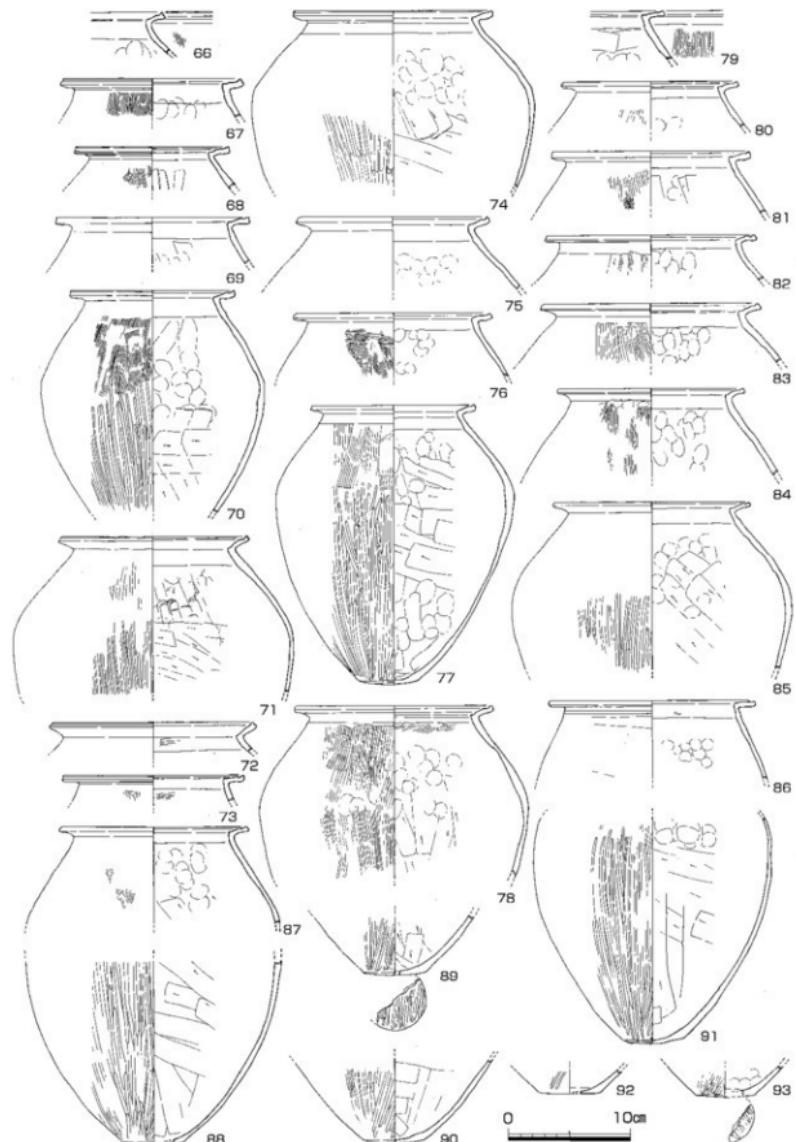
溝状遺構内より弥生土器壺・甕・鉢・高坏・サヌカイトが出土している。

33~46は壺で、頭部が直線的に外上方に延びるもの（外傾）、直線的に内上方に延びるもの（内傾）、直線的に上方に延びるものと頭部の形態で3タイプに分類できる。全て口縁部はほぼ水平方向に屈曲し、口縁端部は僅かに上方に摘み上げる。46は細頸壺の体部で、体部外面には主としてヘラ磨きが、内面には指頭痕とヘラ削りが施されている。壺36~46の胎土に角閃石を含む。

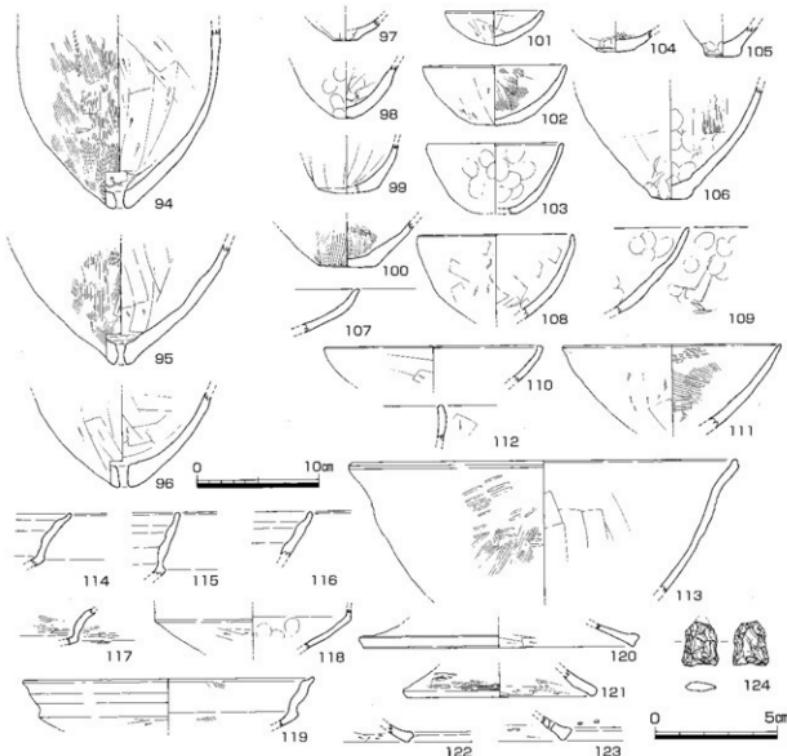
47~93は甕で、47~65が胎土に角閃石を含まない甕で、66~93が胎土に角閃石を含む甕である。角閃石を含まない甕は全体にやや小振りで、頭部内面に明瞭な稜を持ち、「く」の字に屈曲するものが認められる。口縁端部はそのまま丸く終わらせており、体部外面には主としてハケ目が施されているが、中には下半部にのみヘラ削りが施されているものがある。体部最大径は中位か、やや上



第8図 SD02 出土遺物実測図①



第9図 SD02 出土遺物実測図②



第10図 SD02 出土遺物実測図③

方にあるが、54は下位にあり、やや下彫れタイプとなる。底部は丸底のものと直径3~4cmとかなり小さくなるが、平底を呈するものが認められる。角閃石を含む甕は頸部内面に1cm程度の上下方向の平坦面を持ち、外面は「く」の字に屈曲する。口縁端部は若干上方に摘み上げる。体部外面の体部最大径部分から下半には継方向のヘラ磨きが、上半には縱方向のハケ目が施され、体部内面には下半にヘラ削りが、上半に指ナデ、指痕が施されている。底部は直径4~5cmと小さく、やや突出気味となる。底部外面にもヘラ磨きが施される。体部最大径の位置が個体によって若干上下するものの形態・調整が共通しており、全て下川津B類土器と考えられる。

94~96は瓶、97~113は鉢、114~123は高坏である。

鉢は多量に出土しており、口径約8cm程度の小型のもの、口径約12cm程度の中型のもの、口径約18cm程度の大型のものの3種類を主とし、口径約30cmを超える大型のものが少量混ざる。体部はほとんどが内湾氣味で、底部は丸底のものと平底のものが認められる。

高坏は口縁部がやや外反しながら外上方に延び、口縁端部内面に凹線状の窪みを持つ。脚部は直線的に外方に延び、端部は方形に終わらせる。脚部内面には横方向のヘラ削りが顕著に施されている。脚部には直径2mm程度の穿孔が確認できる。高坏114~123の胎土に角閃石を含む。

胎土に角閃石を含む土器の全体の割合は約12.3%である。

出土遺物より時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

SD03

SD03は第I調査区南部で検出した溝状遺構で、SD02を完掘した状況でSD03北側の掘り方を検出した。掘り方はSD02と同様に北側の掘り方は検出しているが、南側の掘り方は調査区外に延びており、確認していない。流路方向は南西~北東方向と若干SD02とは異なる。規模は最大幅（土層断面による現存長）約3.35m、深さ約1.42m、検出長約4.0mを測る。溝状遺構内堆積土は土層断面（A-A'）で見ると単層で、第10層淡灰色小礫混じり粗砂が堆積し、断面は上部がかなり開く、「U」字状を呈している。

溝状遺構内より弥生土器壺・甕・鉢・高坏・製塙土器・サヌカイトが出土している。これらの遺物は溝の深さが約1.42mであることから、上位(125~223)と下位(224~263)に分けて取り上げている。

125~223は上位出土遺物である。125~138は壺で、頸部が直線的に外上方に延びるもの（外傾）、直線的に上方に延びるもの、朝顔形に開くもの（129）と頸部の形態で3タイプに分類できる。129以外の口縁部は全てほぼ水平方向に屈曲し、口縁端部は僅かに上方に摘み上げる。133は二重口縁壺で、口縁部外面に櫛先による刺突文が施されている。135・136は細頸壺の頸部から口縁部で、やや内湾気味に上方に延びる。137・138は小型丸底壺である。壺125~131・135~137の胎土に角閃石を含む。

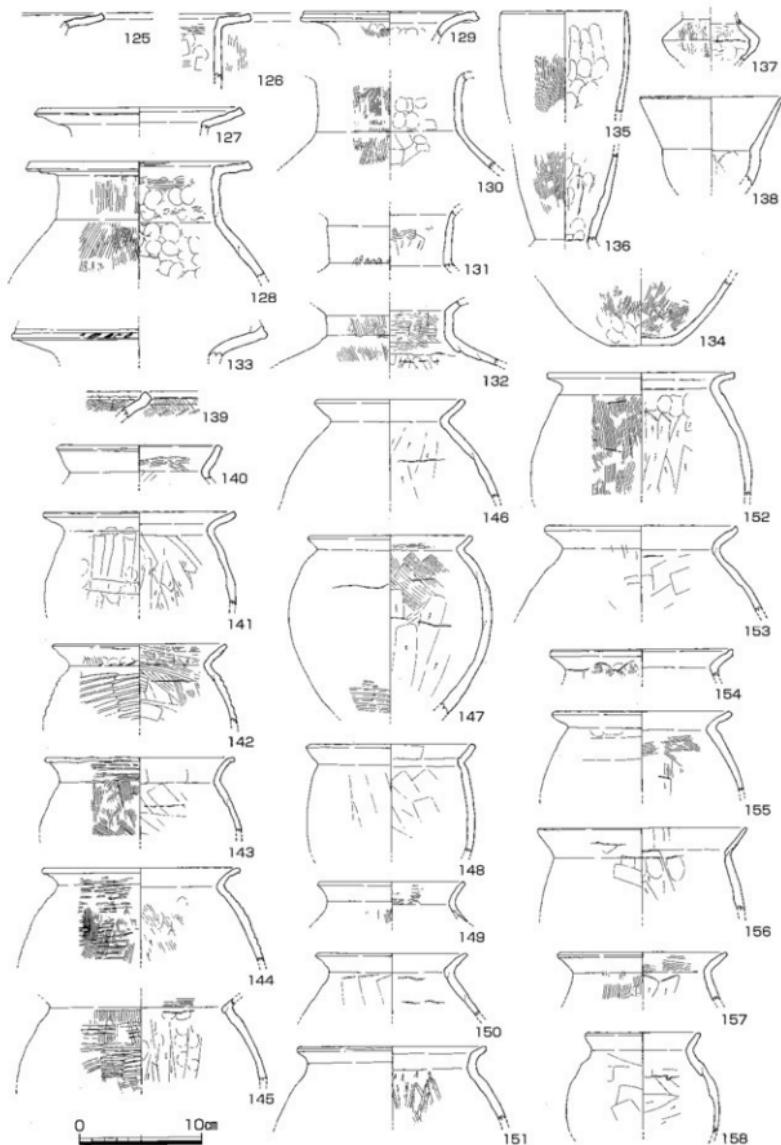
139~178は甕で、139~158・172~175が胎土に角閃石を含まない甕で、159~171・176~178が胎土に角閃石を含む甕である。角閃石を含まない甕は全体にやや小振りで、頸部内面に明瞭な稜を持ち、「く」の字に屈曲する。口縁端部はそのまま丸く終わらせるものと方形に終わらせるものがある。体部外面には主としてハケ目が施されているが、中には叩き痕が明瞭に認められるものもある。体部最大径はやや上方にある。角閃石を含む甕は頸部内面に1~2cm程度の上下方向の平坦面を持ち、外面は「く」の字に屈曲する。口縁端部は若干上方に摘み上げる。体部外面の体部最大径部分から下半には縦方向のヘラ磨きが、上半には縦方向のハケ目が施され、体部内面には下半にヘラ削りが、上半に指ナデ、指頭痕が施されている。底部は直径5~6cmで、平底のものとやや突出気味のものがある。底部外面にもヘラ磨きが施される。これらは形態・調整が共通しており、全て下川津B類土器と考えられる。

179~183は瓶、184~207は鉢、208~222は高坏、223は製塙土器である。

瓶には鉢形のものが認められる。

鉢は多量に出土しており、口径約8~9cm程度の小型のもの、口径約13~14cm程度の中型のもの、口径約17~18cm程度の大型のものの3種類を主とし、口径約40cmを超える大型のものが少量混ざる。体部は直線的に外上方に延びるものと内湾しながら外上方に延びるものがあり、底部は丸底のものと平底のものが認められる。

高坏は口縁部が外反しながら外上方に延び、口縁端部内面に明瞭な凹線状の窪みを持つ。脚部は

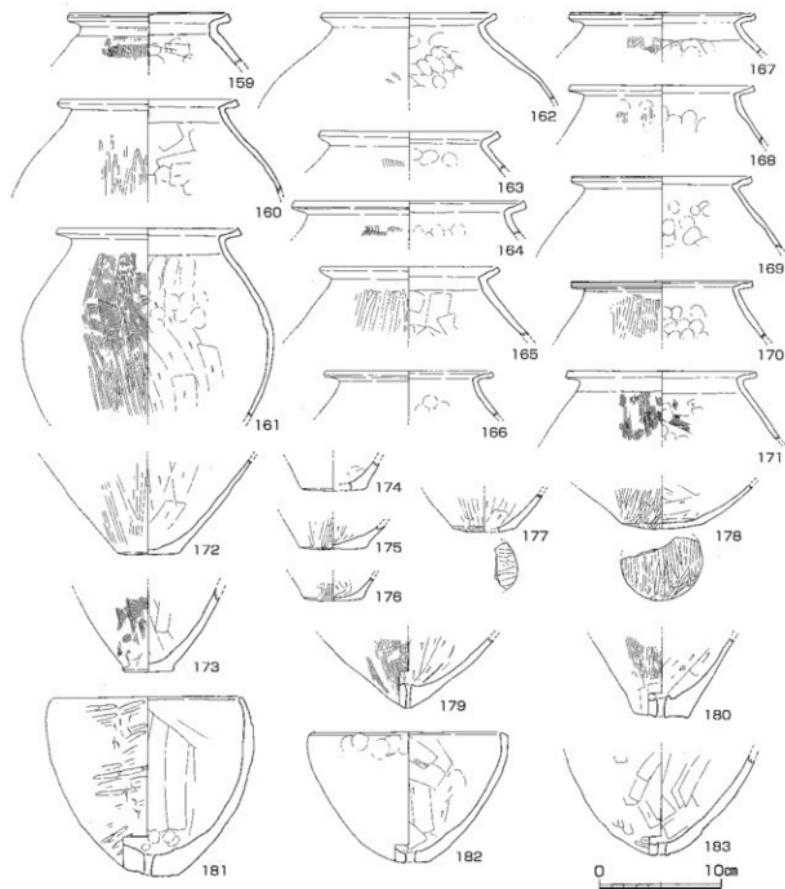


第11図 SD03 出土遺物実測図①

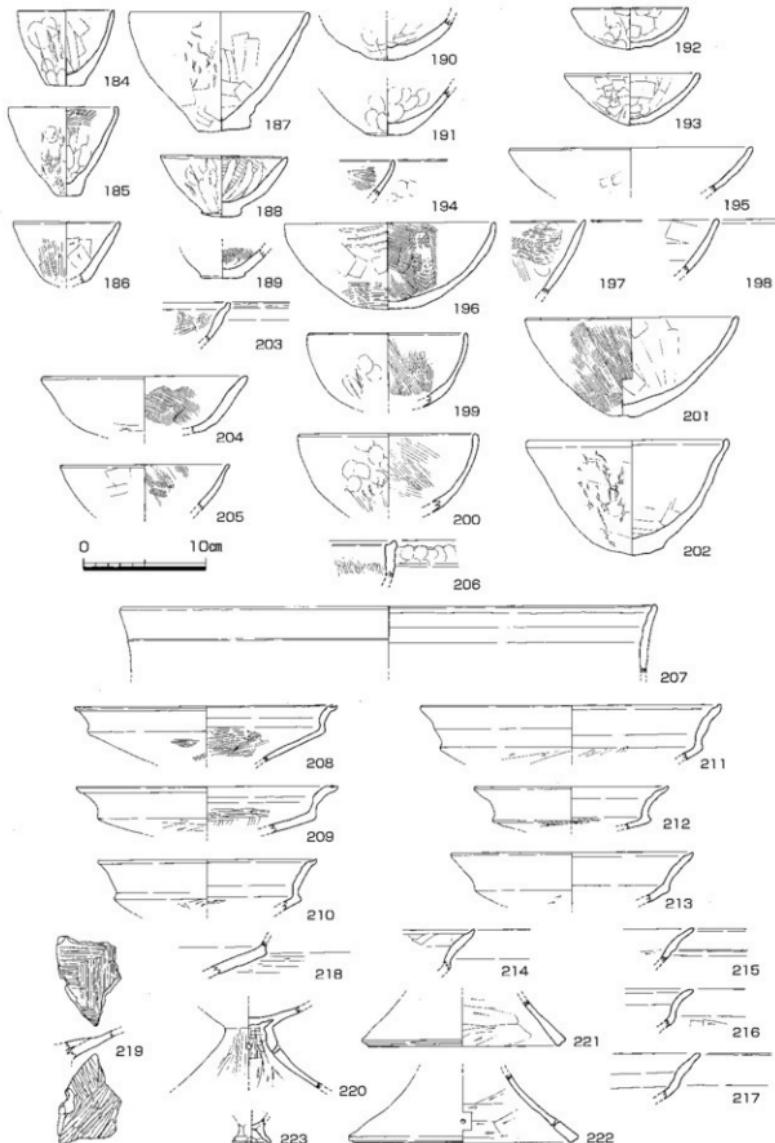
直線的に外方に延び、端部は方形に終わらせる。脚部内面には横方向のヘラ削りが顕著に施されている。脚部には直径2mm程度の穿孔が確認できる。高坏208~214・218・219・221・222の胎土に角閃石を含む。

224~263は下位出土遺物である。224~227は壺で、上方に延びるもの、朝顔形に開くもの（224）と頸部の形態で2タイプに分類できる。

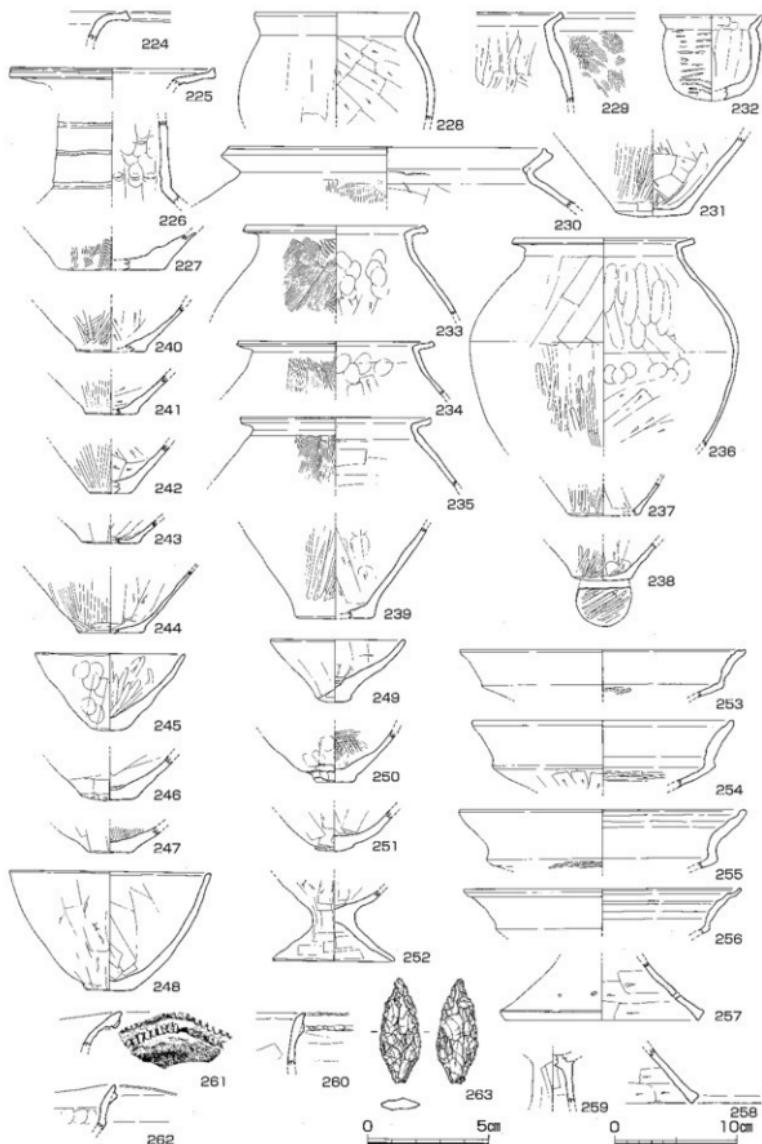
228~244は甕で、233~238が胎土に角閃石を含む甕で、それ以外は胎土に角閃石を含まない甕である。角閃石を含まない甕は頸部内面に明瞭な稜を持ち、「く」の字に屈曲するものと緩やかに屈曲するものがある。口縁端部はそのまま丸く終わらせるものと方形に終わらせるものがある。角閃



第12図 SD03 出土遺物実測図②



第13図 SD03 出土遺物実測図③



第14図 SD03 出土遺物実測図④

石を含む甕は頸部内面に1~2cm程度の上下方向の平坦面を持ち、外面は「く」の字に屈曲し、口縁端部は若干上方に摘み上げる。体部外面の体部最大径部分から下半には縱方向のヘラ磨きが、上半には縱方向のハケ目が施され、体部内面には下半にヘラ削りが、上半に指ナデ、指頭痕が施されている。底部は直径5~6cmで、平底のものとやや突出気味のものがある。底部外面にもヘラ磨きが施される。これらは形態・調整が共通しており、全て下川津B類土器と考えられる。

245~252は鉢、253~259は高杯、260~262は突帯文系土器である。

鉢は口径約11~12cm程度の中型のもの、口径約16cm程度の大型のものの2種類を主とし、脚付の鉢(252)も出土している。体部は直線的に外方に延びるものと内湾しながら外方に延びるものがあり、底部は平底を呈する。

高杯は口縁部が外反しながら外方に延び、口縁端部内面に明瞭な凹線状の窪みを持つ。脚部は直線的に外方に延び、端部は方形に終わらせる。脚部内面には横方向のヘラ削りが顕著に施されている。脚部には直径2mm程度の穿孔が確認できる。高杯253~258の胎土に角閃石を含む。

胎土に角閃石を含む土器の全体の割合は約12.2%である。

出土遺物より時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

包含層出土遺物

282~286は第1遺構面直上、土層断面(A-A')の第3層赤褐色小礫混じり粗砂層から出土した遺物である。

282は弥生土器壺、283~285は縄文土器、286はサヌカイト製の石鎌である。

283は突帯文系土器で口縁部外面に刻み目を持つ突帯が1条貼り付けられている。また口唇部にも刻み目を持つ。284はボウル状を呈する鉢である。286は有茎式の石鎌である。

第II調査区

第II調査区は南北に長い調査対象地のほぼ中央部に位置する調査区である。当初南側の第II-2調査区のみの調査であったが、調査区北側への遺構の広がりを確認したために、北側にトレンチ状の調査区を設定し、発掘調査を実施した。本報告書では平成8年度の調査時の調査区名を踏襲し、北側を第II-1調査区、南側を第II-2調査区とする。

第II-1調査区は東西約1.8m、南北約6.0m、調査面積約10.8m²、第II-2調査区は東西約3.4m、南北約8.5m、調査面積約28.9m²を測る。

発掘調査の結果、それぞれの調査区で遺構面を2面確認した。

第II-1調査区の第1遺構面は第15図土層断面(D-D')で見ると現地表下約1.1m(標高約47.60m)、第6層橙灰~黃灰色粘質土上面で確認している。現地盤から第1遺構面の間には上位から約30cmが客土、概ね層厚20~30cm程度の第1~3層灰色系・黄色・黒色系のシルト層・粘質土層が堆積し、第4層として弥生時代後期の遺物を少量包含する層厚約20cmの灰橙色小礫混じり粗砂層が堆積する。この間に弥生時代以降の遺構面は確認していない。

第2遺構面は第15図土層断面(D-D')で見ると第1遺構面下約0.2m(標高約47.40m)、第7層灰色小礫混じりシルト上面で確認している。第1遺構面と第2遺構面の間には第6層橙灰~黃灰色粘質土が堆積し、この層から少量の土器片が出土している。

それぞれの遺構面を形成する基盤層は土質が粘質土・シルトからなり、かなり安定していたと考えられるが、第1遺構面上に堆積した土層は小礫混じりの粗砂層、シルト層と洪水等による堆積層と考えられ、安定した土層ではない。

第1遺構面で弥生時代と考えられる遺構を検出している。検出した遺構は溝状遺構の北側肩部と溝状遺構底面から掘削された土坑である。第2遺構面では遺構を検出していない。

一方、第II-2調査区の第1遺構面は第15回土層断面（E-E'）で見ると現地表下約0.8m（標高約47.88m）、第8層橙色粘質土上面で確認している。現地盤から第1遺構面の間には上位から約30cmが客土、概ね層厚10~20cm程度の第1~5層橙色系・灰色系・黒色系のシルト層・粘質土層が堆積し、第6層として弥生時代後期の遺物を少量包含する層厚約10cmの灰橙色小礫混じり粗砂層が堆積する。この間に弥生時代以降の遺構面は確認していない。

第2遺構面は第15回土層断面（E-E'）で見ると第1遺構面下約0.55m（標高約47.30m）、第10層橙色小礫混じりシルト上面で確認している。第1遺構面と第2遺構面の間には第8層橙色粘質土が堆積し、この層から少量の土器片が出土している。

それぞれの遺構面を形成する基盤層は土質が粘質土・シルトとかなり安定していたと考えられるが、第1遺構面上に堆積した土層は小礫混じりの粗砂層、シルト層と洪水等による堆積層と考えられ、安定した土層ではない。

第1遺構面では弥生時代と考えられる遺構を検出している。検出した遺構は溝状遺構の南側肩部である。第2遺構面では土坑を検出している。

それぞれの調査区で確認した遺構面は連続する調査区で、堆積土層も概ね同じであること、検出面の標高が概ね同じであることから同一面と考えられる。そのためそれぞれの遺構面を同一面ととらえ、遺構を検討したい。

第1遺構面で検出した遺構は土坑1基（SK01）、溝状遺構1条（SD04）で、出土遺物から見ると全て弥生時代後期、第2遺構面で検出した遺構は土坑1基（SK02）で、出土遺物から見ると縄文時代晩期～弥生時代前期にかけてのものである。

縄文時代晩期～弥生時代前期

SK02

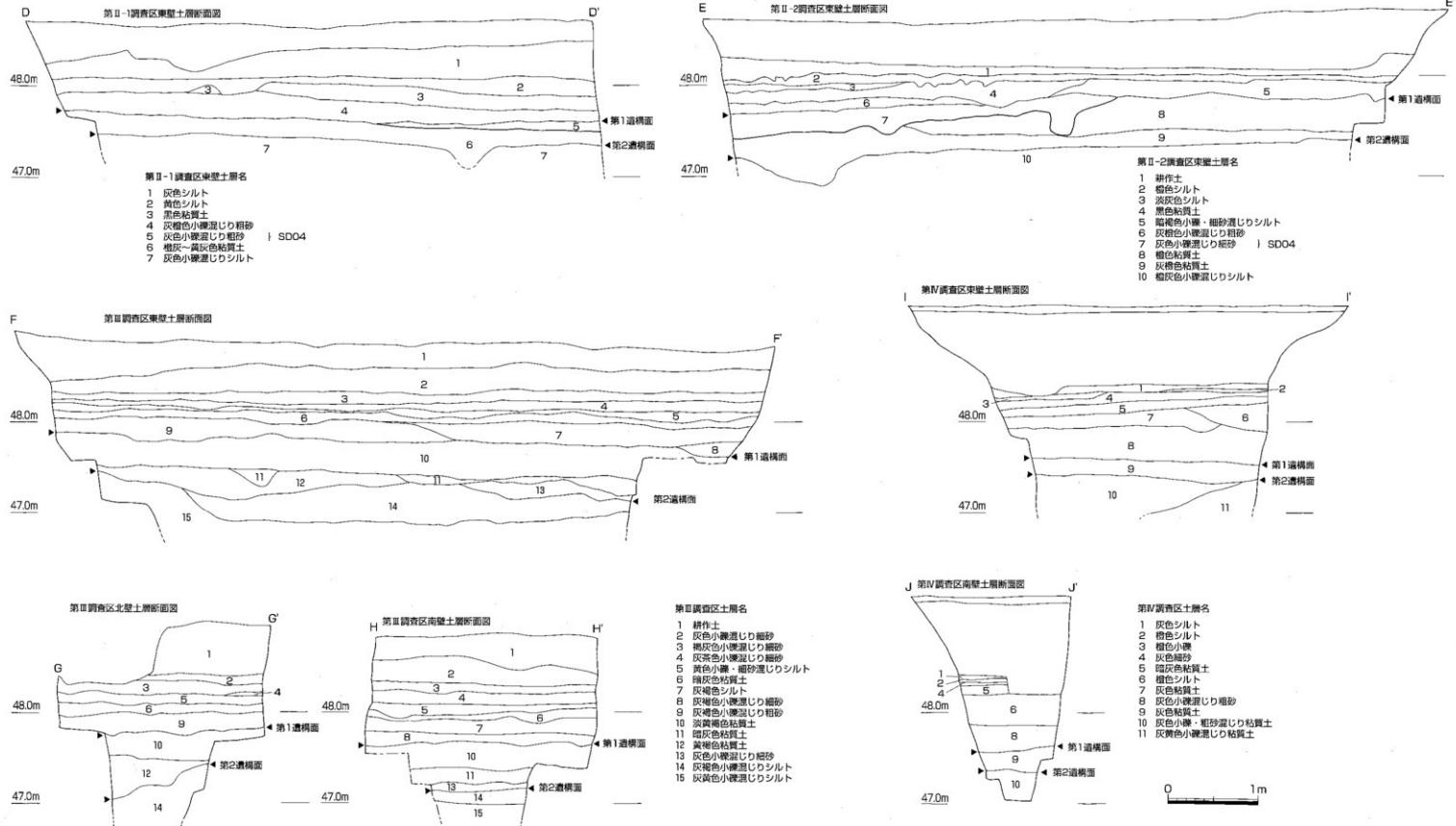
SK02は第II調査区中央部で検出した土坑跡である。平面形態は隅丸方形で、断面形態は上部が緩やかに開く「U」字状を呈する。規模は西-東方向（長軸残存長）約2.13m、北-南方向（短軸）約1.80m、検出面からの深さは約0.73mを測る。土坑の堆積土は第17回土層断面（L-L'）で見ると4層で、第2層が灰黄色細砂、第3層が灰黄色小礫混じり（少量）粘質土、第4層が灰黄色小礫混じり（多量）粘質土、第5層が灰黄色粘質土層となり、堆積土は粘質土を主体とする。

土坑内から縄文土器の小片が出土している。固化遺物はないが、時期は縄文時代と考えられる。

弥生時代後期

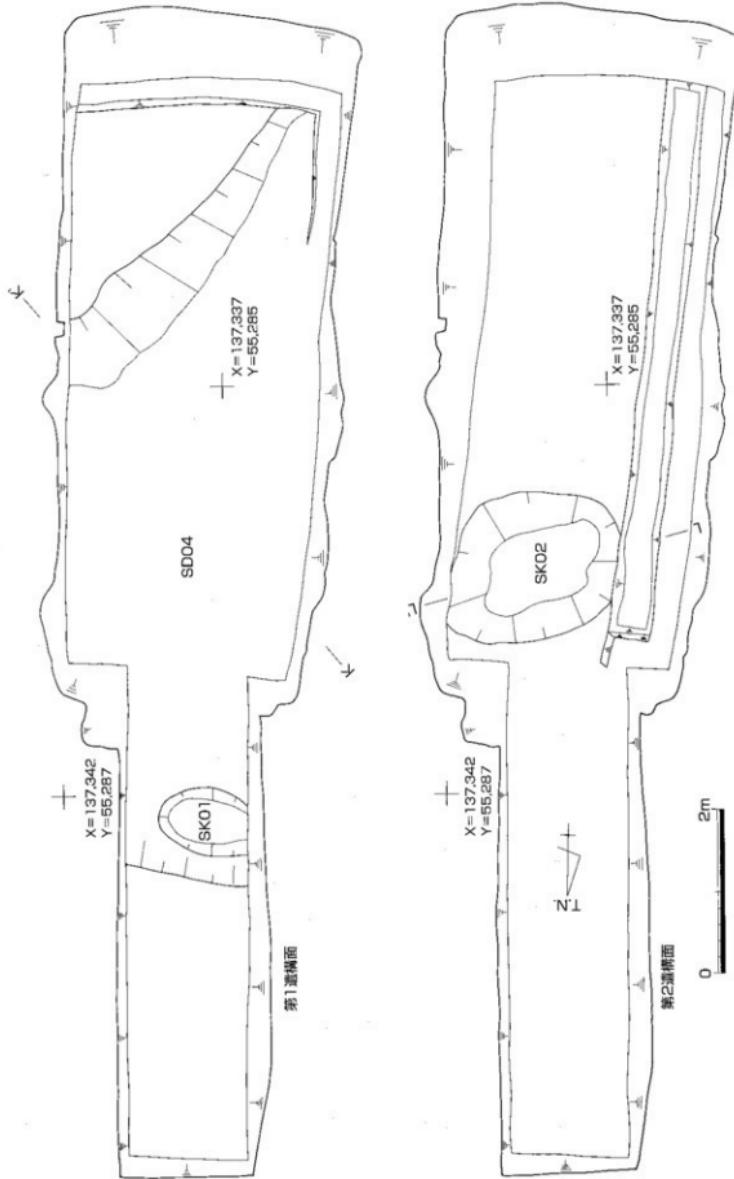
SK01

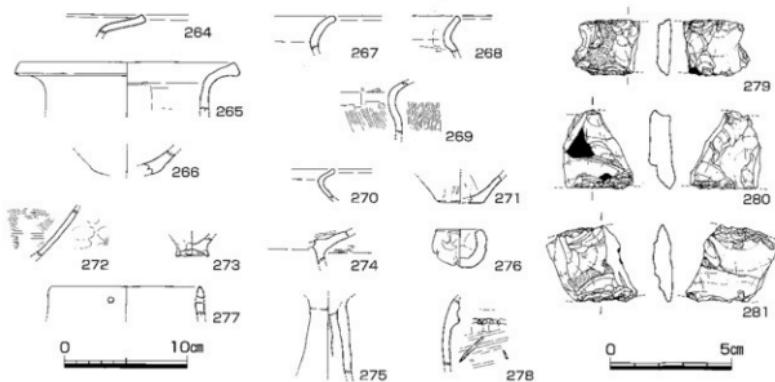
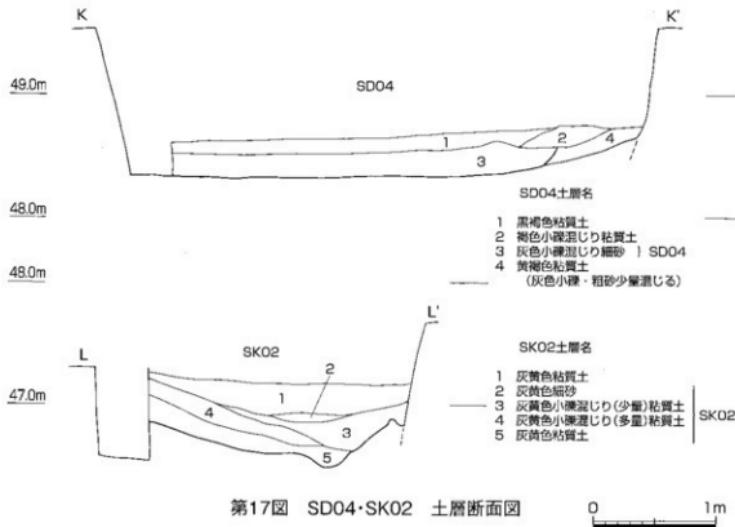
SK01は第II調査区北側で検出した土坑跡である。溝状遺構（SD04）の北側底面から掘削されており、溝状遺構より古いことが解る。平面形態は梢円形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は



第15図 第II～IV調査区土層断面図

第16图 第II调查区遗物平面图





第18図 SD04 出土遺物実測図

西 - 東方向（長軸残存長）約1.10m、北 - 南方向（短軸）約0.82m、検出面からの深さは約0.16mを測る。土坑の堆積土は単層で、灰橙色系の砂混じり粗砂が堆積している。

土坑内から遺物が出土しておらず、時期は不明であるが、掘削面及び土坑内堆積土の状況から弥生時代と考えられる。

SD04

SD04は第II調査区中央部で検出した溝状遺構で、第II-1調査区で北側の肩部を、第II-2調査区で南側の肩部を検出した。それぞれの溝状遺構の肩部は北側がほぼ東西方向、南側が北東-南西方向と東側の流路幅より西側の流路幅が広がるものと考えられる。流路方向は概ね東-西方向を取る。規模は最大幅約10.5m、深さ約0.24m、検出長約3.1mを測る。溝内堆積土は第17図土層断面（K-K'）見ると単層で、第3層灰色小礫混じり細砂が堆積し、断面は上部がかなり開く、浅い「U」字状を呈している。

溝状遺構内より弥生土器壺・甕・鉢・高坏・石製品などが出土している。

264~266は壺で、底部は丸底気味の平底を呈する。頸部は直線的に上方に延び、口縁部はほぼ水平に屈曲し、口縁端部は上方に短く摘み上げる。

267~271は甕で、267~269が胎土に角閃石を含まない甕で、270・271が胎土に角閃石を含む甕である。角閃石を含まない甕は、頸部が緩やかに屈曲するものと僅かに稜を持ち屈曲するものが認められるが、全て口縁端部はそのまま終わらせる。角閃石を含む甕は、底部が平底で、頸部内面に稜を持ち、「く」の字に屈曲する。口縁端部は若干上方に摘み上げる。下川津B類土器と考えられる。

272・273は鉢、274・275は高坏、276はミニチュア土器である。

胎土に角閃石を含む土器の全体の割合は約9.0%である。

出土遺物より時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

包含層出土遺物

287・288は第1遺構面直上、土層断面（D-D'）第4層灰橙色小礫混じり粗砂から出土した遺物である。

287は鉢、288は高坏である。鉢は口径8.5cmと小型のもので、底部は丸底を呈する。時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。

290~293は土層断面（D-D'）第6層橙灰色～黄灰色粘質土から出土した遺物である。

290・291は深鉢で、頸部及び体部外面に貝殻条痕のちへラ描きによる沈線が施されている。時期は绳文時代晚期～弥生時代前期と考えられる。

第III調査区

第III調査区は第IV調査区から北に約20mの距離に位置する調査区で、東西約2.8m、南北約8.8m、調査面積約25m²を測る。

発掘調査の結果、第I・II調査区と同様に、遺構面と考えられる面を2面確認した。

第1面は第15図土層断面（F-F'）で見ると現地表下約1.0m（標高約47.78m）、第10層淡黄褐色粘質土上面で確認している。現地盤から第1面の間に概ね層厚10~20cm程度の第1~7層灰色系・黄色系・褐色系の砂層・シルト層・粘質土層が堆積し、第8・9層として弥生時代後期の遺物を少量包含する層厚約35cmの灰褐色小礫混じり細砂～粗砂層が堆積する。この間に遺構面となる面は確認していない。

第2面は第15図土層断面（F-F'）で見ると第1面下約0.5m（標高約47.29m）、第14層灰褐色小礫混じりシルト上面で確認している。

それぞれの面を形成する基盤層は土質が粘質土・シルトと安定していたと考えられるが、第1面上に堆積した土層は細砂層、シルト層と安定した土層ではなく、洪水による堆積がかなり頻繁にあったことが推測できる。

第1・2面で遺構は確認していないが、それぞれの上面に堆積する土層や第1・2面を形成する基盤層が類似することから第I・II調査区の第1・2遺構面とそれぞれが同じ面と考えられる。

第1面の時期は第1面が直上の第8・9層から少量の弥生時代後期の遺物が出土していること、第I・II調査区の連続性から弥生時代後期中葉、第2面の時期は第I・II調査区の連続性から縄文時代晩期と考えられる。

第IV調査区

第IV調査区は南北に長い調査対象地の南端に位置する調査区で、東西約2.5m、南北約5.2m、調査面積約13m²と最小を測る。この調査区は平成8年度の文化行政課による試掘調査で弥生土器片、縄文土器片が出土したことによって調査対象地となった部分である。

発掘調査の結果、第I～III調査区と同様に、遺構面と考えられる面を2面確認した。

第1面は第15図土層断面（I-I'）で見ると現地表下約1.7m（標高約47.55m）、第9層灰色粘質土上面で確認している。現地盤から第1面の間には上位から約90cmが客土としての花崗土、概ね層厚10cm程度の第1～7層灰色系・橙色系の砂層・シルト層・粘質土層が堆積し、第8層として弥生時代中期・後期の遺物を少量包含する層厚約35cmの灰色小砾混じり粗砂層が堆積する。この間に遺構面となる面は確認していない。

第2面は第15図土層断面（I-I'）で見ると第1面下約0.2m（標高約47.35m）、第10層灰色小砾・粗砂混じり粘質土上面で確認している。この間の第9層灰色粘質土層下位から少量の土器片が出土している。

それぞれの面を形成する基盤層は土質が粘質土ととなり安定していたと考えられるが、第1面上に堆積した土層は小砾混じりの粗砂層、シルト層と安定した土層ではなく、洪水による堆積がかなり頻繁にあったことが推測できる。

第1・2面で遺構は確認していないが、それぞれの上面に堆積する土層や第1・2面を形成する基盤層が類似することから第I～III調査区の第1・2遺構面とそれぞれが同じ面と考えられる。

第1面の時期は第1面が直上の第8層から少量の弥生時代後期の遺物が出土していること、第I～III調査区の連続性から弥生時代後期中葉、第2面の時期は第I～III調査区の連続性から縄文時代晩期と考えられる。

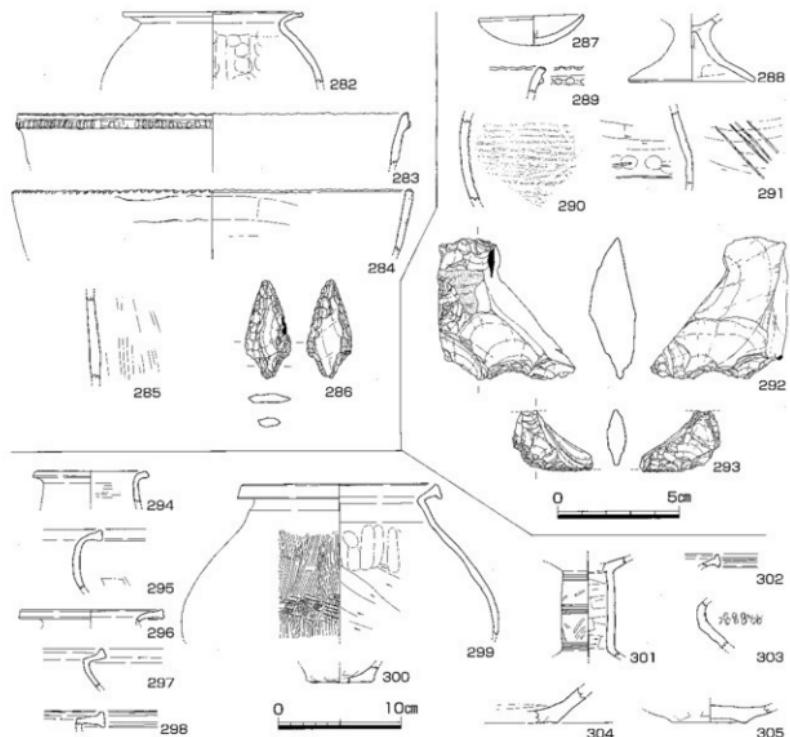
包含層出土遺物

294～305は第1面直上の第8層灰色小砾混じり粗砂層から出土した遺物である。

294・295は壺、296～300・302・303は甕、301は高坏、304・305は縄文土器の底部である。

304・305以外は弥生時代のもので、甕は口縁端部が上下に拡張されているものや頸部外面に刺突文が施されているもの、体部外面最大径部分に櫛先刺突文が施されているものがあることから弥生時代後期初頭～後期中葉と若干の時期幅が認められる。高坏は脚部が筒状を呈し、下部で外方に屈曲するものである。筒状部分の外面には上・中・下に2～3条を1単位とする沈線が施され、部分

的に朱の付着が認められる。



第19図 第I・II・IV調査区包含層 出土遺物実測図

第4章 まとめ

1. 検出遺構面について

竹元遺跡では南北に長い発掘調査対象地の中で、発掘調査を実施した調査区が4箇所あり、北から第I～IV調査区と設定した。それぞれの調査区は現道・搅乱等により約4～20mの間隔をあけて設定されているため遺構面の連続性は確認できない。しかし層序的に見ると全ての調査区で灰色～灰褐色～灰橙色～赤褐色と若干の色調差はあるが小礫混じり粗砂層を確認し、この土層は第I・II調査区では第I遺構面上に、第III・IV調査区では第I面上に堆積していることを確認した。また第I遺構面の基盤層は第I調査区を除くと灰色～淡黄褐色～橙灰色～黄灰色と若干の色調差はあるが全て粘質土となり、土層序的に見ても各調査区の第I遺構面は同一遺構面と考えられる。

各調査区の第I遺構面の標高は、第I調査区で約47.94m、第II調査区で約47.88～47.60m、第III調査区で約47.78m、第IV調査区で約47.55mと第I調査区と第IV調査区の比高差は約0.39mとなり、第I調査区から第IV調査区に向けて傾斜していることが確認できる。またこれらの調査区の中の第I遺構面で遺構を検出した調査区は第I・II調査区で、標高約47.90m前後とほぼ同じ標高で検出しており、同一面であることを裏付けている。

第2遺構面は土層序的に見ると第I調査区を除き第I遺構面の基盤層となった灰色～淡黄褐色～橙灰色～黄灰色粘質土の第I遺構面下約0.2～0.6mにある。第2遺構面の基盤層は灰色～灰褐色～橙灰色と若干の色調差はあるが小礫混じり粘質土～シルトで、概ね同一層と考えられ、各調査区の第2遺構面は同一遺構面と考えられる。

各調査区の第2遺構面の標高は第I調査区で約46.60m、第II調査区で約47.30～47.40m、第III調査区で約47.29m、第IV調査区で約47.35mと第II～IV調査区は第2遺構面を標高約47.30m前後で検出しているが、第I調査区では約0.70m低くなり、第II調査区から第I調査区に向けて遺構面の傾斜が確認できる。これらの調査区の中の第2遺構面で遺構を検出した調査区は第I・II調査区で、安定した第II調査区では土坑を、やや低所となり、不安定な第I調査区では蛇行した自然流路と検出遺構差が確認できる。

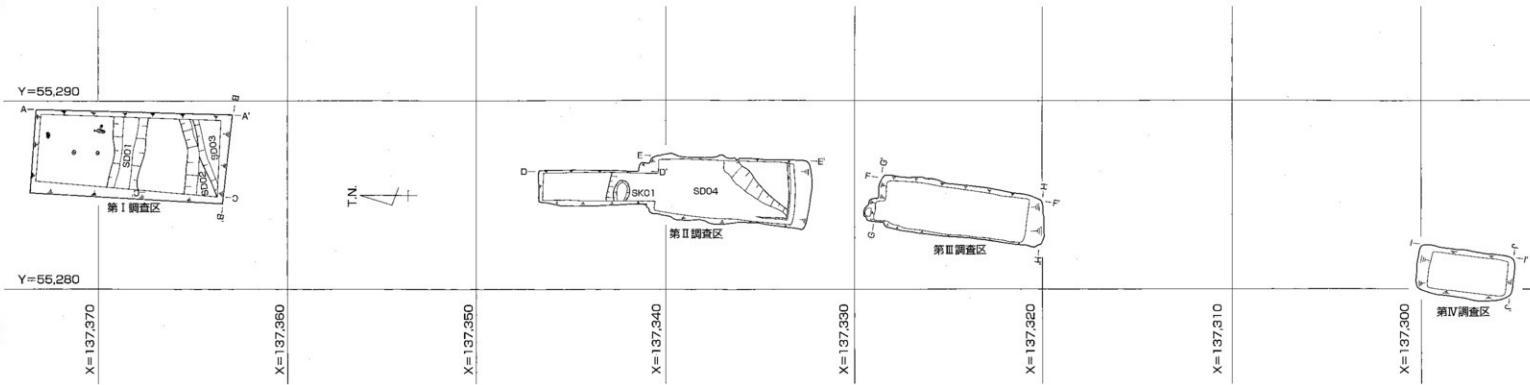
竹元遺跡ではこの第1・2遺構面以外に遺構面はなく、第1遺構面の上位に堆積する土層も粗砂層・砂層・シルト層と洪水等によって一気に堆積した土層で、立地的には安定した場所ではなかったものと考えられる。

2. 検出遺構について

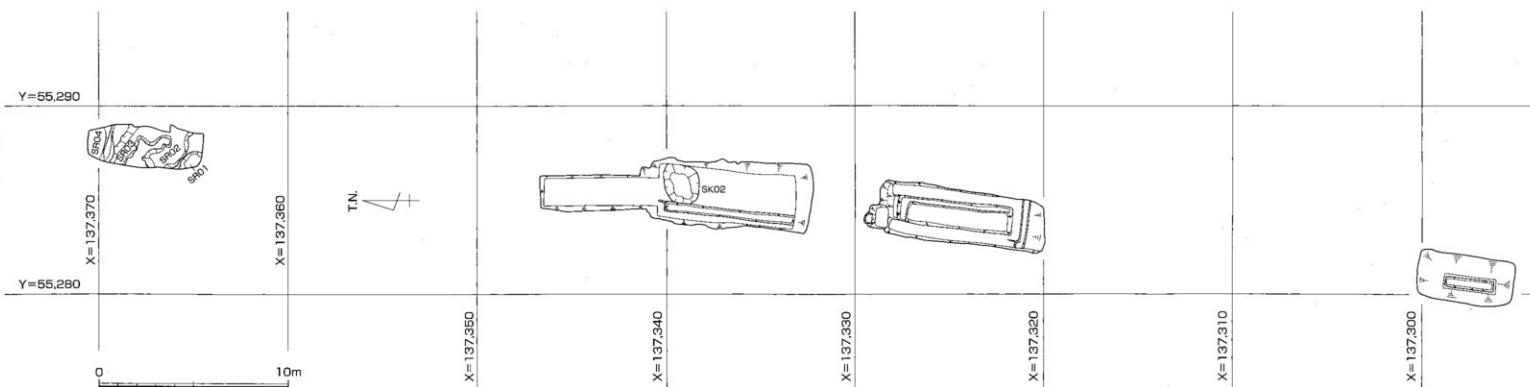
竹元遺跡の第I～IV調査区で検出した遺構は、土坑跡・溝状遺構・柱穴跡・自然流路跡である。

このうち第I遺構面で検出した遺構は土坑跡・溝状遺構・柱穴跡で、第I・II調査区で検出した。その他の第III・IV調査区では遺構を検出しておらず、これらの調査区が竹元遺跡の遺構の広がりの南限を示しているのか、削平を受け、遺構がないのかは不明であるが、第I調査区の北側で平成5年に文化行政課の発掘調査で第I遺構面と考えられる遺構面において竪穴住居跡を検出していることから南限の可能性が高いと考える。また、第I調査区で検出した溝状遺構SD01～03は東西方向に流路を取り、特にSD01は深さ約1.0mのV字溝であることから集落の区画溝の可能性がある。しかし、第III・IV調査区での検出遺構の無い状況、第I調査区での溝状遺構の流路方向、各調査区で

第1遺構面(弥生時代後期)



第2遺構面(縄文時代晩期)



第20図 遺構変遷図

の遺構の希薄さは、今回の調査区が竹元遺跡の集落の中心部分とは考えられず、かなり縁辺部で、第Ⅰ調査区で検出した溝状遺構は区画溝ではなく、集落からの排水溝と考えるのが妥当である。柱穴は第Ⅰ調査区北側で検出し、区画溝あるいは排水溝としたSD01より北側にある。柱穴の配置から竪穴住居・掘立柱建物を構成する柱穴とは考えられない。

現在周知の埋蔵文化財包蔵地として確認されている竹元遺跡は調査区の東部に位置し、竹元遺跡の集落の中心は調査区東部と考えられるが、また一方調査区北部の段丘崖の形成が弥生時代以降であれば、竹元遺跡の集落は段丘崖によって削平され、集落の南辺のみが残っている可能性も考えられる。

今回の発掘調査からこれらを検証する資料は確認できなかった。

第2遺構面で検出した遺構は土坑跡・自然流路跡で、第Ⅰ・Ⅱ調査区で検出した。その他の第Ⅲ・Ⅳ調査区では遺構を検出していない。特に第Ⅰ調査区では自然流路跡を検出しており、検出面もかなり低いことから不安定な部分であった可能性が考えられ、その他の遺構も土坑1基であることから、縄文時代の集落が近接して所在する可能性は低い。

3. 遺構の変遷について

検出した遺構から第1遺構面は弥生時代後期中葉、第2遺構面は縄文時代晚期～弥生時代前期と考えられる。

第1遺構面

検出した遺構は土坑跡・溝状遺構・柱穴跡で、時期は弥生時代後期中葉である。調査区北部に集中する。溝状遺構はSD02・03とSD01が約2.3mの間隔をあけ、東西方向に併走する。この溝より北側で柱穴、平成5年の文化行政課の発掘調査で竪穴住居跡を検出していることから、集落の南限を画する溝の可能性が考えられるが、調査区北部が段丘崖となっていることから詳細は不明である。

第2遺構面

検出した遺構は土坑跡・自然流路跡で、時期は縄文時代晚期である。調査区北部に集中する。自然流路跡は調査区内でかなり蛇行しており、SR04→SR03→SR02の順で上位にあり、短期間に流路を変え、堆積したものと考えられる。その他の遺構は土坑のみと希薄である。

4.まとめ

今回の発掘調査の結果、竹元遺跡の集落の広がり、遺跡の時期が明確になったと考えられる。

また竹元遺跡の所在地が高松平野の南東部に位置し、周囲を低丘陵によって囲まれた盆地状を呈する位置にある。この隔絶した位置での集落の形成が縄文時代晚期まで遡ることはこの地域の歴史を考えるに当たり、有効な資料となつた。また、高様川を挟んで西側には古代の寺院である下司廬寺があり、この古代寺院を造営した集団との関係も弥生時代からの遺跡の変遷の中で今後明らかになっていくものと考えられる。

第1表 陶器観察表

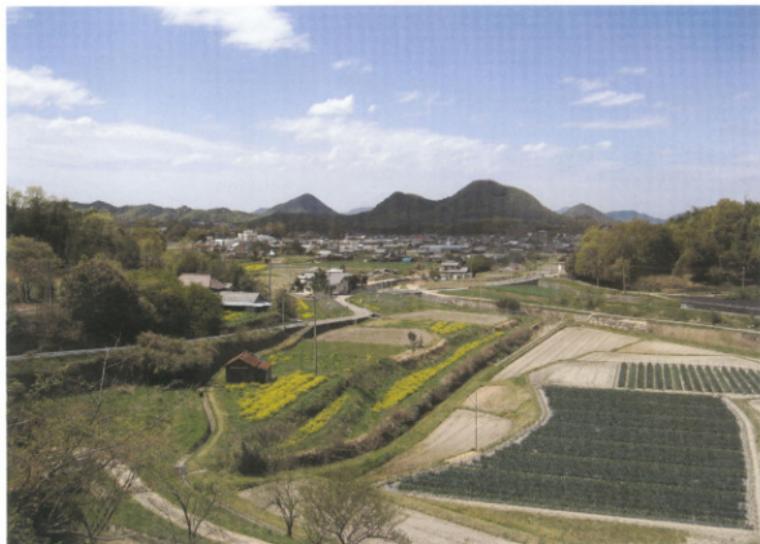
陶器 番号	地質 学的 分類	種 類	器 種	測定名	口径 cm	底径 cm	高さ cm	形状	外 色 調		内 色 調		性 質	備 考
									左 右	前 後	左 右	前 後		
1	6	13	灰土器	碗	SD01	—	—	扁平・浅	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	体部透光
2	6	13	灰土器	深碗	SD01	—	—	扁平・浅	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	体部透光
3	6	13	灰土器	深碗	SD01	25.4	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
4	6	13	灰土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
5	6	13	灰土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
6	6	13	灰土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
7	6	13	灰土器	深盆	SD02	—	—	扁平・浅	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
8	6	13	灰土器	深盆	SD03	—	—	扁平・浅	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
9	6	13	灰土器	深盆	SD03	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
10	6	13	灰土器	深盆	SD03	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
11	6	13	灰土器	深盆	SD03	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
12	6	13	灰土器	深盆	SD03	11.2	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
13	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	扁平・浅	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
14	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	扁平・浅	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
15	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	扁平・浅	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
16	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	扁平・浅	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
17	7	14	生土器	碗	SD01	12.7	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
18	7	14	生土器	碗	SD01	14.4	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
19	7	14	生土器	碗	SD01	6.2	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
20	7	14	生土器	碗	SD01	11.7	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
21	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
22	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
23	7	14	生土器	碗	SD01	15.8	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
24	7	14	生土器	碗	SD01	30.3	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
25	7	14	生土器	碗	SD01	12.6	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
26	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
27	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
28	7	14	生土器	碗	SD01	15.2	8.9	3.4	中・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
29	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
30	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
31	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
32	7	14	生土器	碗	SD01	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
33	8	14	生土器	碗	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
34	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
35	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
36	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
37	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
38	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
39	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
40	8	14	生土器	盆	SD02	16.4	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
41	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
42	8	14	生土器	盆	SD02	24.2	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
43	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光
44	8	14	生土器	盆	SD02	—	—	中・少	短・少	短・少	短・少	短・少	有ナメ	口縁部透光

種名 学名	分類	品種	品種名	口数	頭高	通量(cm)	外 部 形 状	内部 形 状	調 整		操作量 操作時間	備考
									外 部 特 徴	内 部 特 徴		
番号	種類	品種	品種名	口数	頭高	通量(cm)	外部 特徴	内部 特徴	外 部 特 徴	内 部 特 徴	操作量 操作時間	備考
135 11	育生土器	機器	SD03	10.2	-	-	短少・頭少	頭多	頭少・頭多	頭少・頭多	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・帽ナード・帽脱きえ
136 11	育生土器	機器	SD03	-	-	-	短少・頭少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ハサク自・ヨコナード・解脫
137 11	育生土器	機器	SD03	11.6	-	-	中少・頭少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ハサク自・テラ・解脫
138 11	育生土器	機器	SD03	11.6	-	-	中少・頭少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・テラ・解脫
139 11	育生土器	機器	SD03	12.8	-	-	短少・頭少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
140 11	育生土器	機器	SD03	15.5	-	-	中少・頭少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	10YR5/4E/3C/3W
141 11	育生土器	機器	SD03	14.0	-	-	中少・頭少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
142 11	育生土器	機器	SD03	15.3	-	-	中少・頭少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ハサク自・ヨコナード・解脫
143 11	育生土器	機器	SD03	8.0	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ナダ・ヨコナード・解脫
144 11	育生土器	機器	SD03	15.3	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ナダ・ヨコナード・解脫
145 11	育生土器	機器	SD03	-	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ハサク自・テラ・解脫
146 11	育生土器	機器	SD03	11.6	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
147 11	育生土器	機器	SD03	13.0	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
148 11	育生土器	機器	SD03	13.2	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ナダ・ハサク自
149 11	育生土器	機器	SD03	11.6	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ハサク自・ヨコナード
150 11	育生土器	機器	SD03	12.2	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
151 11	育生土器	機器	SD03	15.2	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ハサク自・ヨコナード
152 11	育生土器	機器	SD03	15.3	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ナダ・ヨコナード・解脫
153 11	育生土器	機器	SD03	15.6	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
154 11	育生土器	機器	SD03	14.8	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
155 11	育生土器	機器	SD03	14.3	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
156 11	育生土器	機器	SD03	16.9	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ナダ・ハサク自
157 11	育生土器	機器	SD03	13.6	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
158 11	育生土器	機器	SD03	9.6	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
159 12	育生土器	機器	SD03	13.0	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
160 12	育生土器	機器	SD03	14.4	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
161 12	育生土器	機器	SD03	14.8	-	-	稍少・細少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
162 12	育生土器	機器	SD03	14.0	-	-	稍少・細少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
163 12	育生土器	機器	SD03	14.6	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
164 12	育生土器	機器	SD03	15.8	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
165 12	育生土器	機器	SD03	14.4	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
166 12	育生土器	機器	SD03	13.7	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
167 12	育生土器	機器	SD03	15.2	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
168 12	育生土器	機器	SD03	16.0	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
169 12	育生土器	機器	SD03	14.8	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
170 12	育生土器	機器	SD03	14.3	-	-	速少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
171 12	育生土器	機器	SD03	15.5	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
172 12	育生土器	機器	SD03	-	-	-	中少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
173 12	育生土器	機器	SD03	-	-	-	4.0 中少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
174 12	育生土器	機器	SD03	-	-	-	5.0 中少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
175 12	育生土器	機器	SD03	-	-	-	5.4 拡少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
176 12	育生土器	機器	SD03	-	-	-	4.0 拡少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
177 12	育生土器	機器	SD03	-	-	-	5.0 中少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
178 12	育生土器	機器	SD03	-	-	-	6.0 中少	頭少	頭少・頭少	頭少	2.5YR5/4E/3C/3W	ヨコナード・解脫
179 12	育生土器	機器	SD03	-	-	-	0.4 短少	頭少	頭少・頭少	頭少	10YR5/4E/3C/3W	ハサク自・解脫

番号	種類	石種	測量名	法長(cm)	幅(石)×高(石)×厚(石)	上	地	外	内		外 内	
									横	高		
180	12	生土岩	塊	SD03	15.4	4.7	3.4	10Y98.4	10Y98.4	10Y98.4	10Y98.4	10Y98.4
181	12	生土岩	塊	SD03	16.4	10.6	3.1	中・少	10Y96.4	10Y97.4	10Y93.1	10Y93.1
182	12	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y96.4	10Y96.4	10Y96.4	10Y96.4
183	12	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y96.4	10Y96.4	10Y96.4	10Y96.4
184	13	生土岩	塊	SD03	7.9	6.2	3.2	少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
185	13	生土岩	塊	SD03	8.5	7.3	2.1	少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
186	13	生土岩	塊	SD03	8.9	7.3	—	少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
187	13	生土岩	塊	SD03	14.3	9.7	4.2	少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
188	13	生土岩	塊	SD03	10.5	5.1	3.2	中・少	10Y96.4	10Y96.4	10Y96.4	10Y96.4
189	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
190	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
191	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
192	13	生土岩	塊	SD03	9.3	9.4	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
193	13	生土岩	塊	SD03	11.1	4.2	0.8	新・少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
194	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
195	13	生土岩	塊	SD03	19.5	—	—	中・少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
196	13	生土岩	塊	SD03	17.3	10.1	5.7	新・少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
197	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
198	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
199	13	生土岩	塊	SD03	13.0	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
200	13	生土岩	塊	SD03	12.9	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
202	13	生土岩	塊	SD03	17.0	8.1	2.7	中・少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
203	13	生土岩	塊	SD03	16.3	9.5	4.9	新・少	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
204	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
205	13	生土岩	塊	SD03	16.6	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
206	13	生土岩	塊	SD03	15.9	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
207	13	生土岩	塊	SD03	42.8	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
208	13	生土岩	塊	SD03	19.6	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
209	13	生土岩	塊	SD03	21.6	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
210	13	生土岩	塊	SD03	18.0	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
211	13	生土岩	塊	SD03	24.5	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
212	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
213	13	生土岩	塊	SD03	15.8	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
214	13	生土岩	塊	SD03	19.6	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
215	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
217	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
218	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
219	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
220	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
221	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
222	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
223	13	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
224	14	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
225	14	生土岩	塊	SD03	18.5	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4
226	14	生土岩	塊	SD03	—	—	—	—	10Y97.4	10Y97.4	10Y96.4	10Y96.4

地質判別番号	種類	岩種名	流量 (cm)	河床高さ	河床斜度	河床底質	河床底質	側面	内	調査		探査
										左	右	
274 15	外生土岩	砂	SD004	—	—	中少	中少	緩・急	5/5FB / 4C	5/5FB / 3C	5/5FB / 3C	断続
275 15	外生土岩	砂	SD004	3.7	3.1	1.5	中少	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
276 15	外生土岩	砂	ミラーベ	SD004	3.7	3.1	—	緩・急	7.5YR7 / 4C	5/5FB / 4C	5/5FB / 4C	断続
277 15	外生土岩	砂	SD004	12.2	—	—	稍・多	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
278 15	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
282 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
283 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
284 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
285 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
287 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
288 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
289 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
290 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
291 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
294 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
296 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
297 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
298 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
299 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
300 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
301 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
302 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
303 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
304 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
305 19	外生土岩	砂	SD004	—	—	稍・多	—	—	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	10YR4 / 5B	断続
石礫品												
地質判別番号	種類	岩種名	流量 (cm)	河床高さ	河床斜度	河床底質	河床底質	側面	内	調査		探査
										左	右	
12 6	砂	SD002	—	—	—	打抜石路 石漠	—	緩・急	5/5FB / 3C	5/5FB / 3C	5/5FB / 3C	サスカート
124 10	砂	SD002	—	—	—	打抜石路 石漠	—	中少	15.0	15.0	4.0	0.02
203 14	砂	SD003	—	—	—	打抜石路 石漠	—	中少	43.0	43.0	4.5	0.07
279 18	砂	SD004	—	—	—	打抜石路 石漠	—	中少	27.5	23.0	6.0	0.08
280 18	砂	SD004	—	—	—	打抜石路 スクリーパー	—	中少	33.0	29.0	12.0	0.05
281 18	砂	SD004	—	—	—	打抜石路 石漠	—	中少	38.0	31.0	8.0	0.05
286 19	砂	SD004	—	—	—	打抜石路 石漠	—	中少	41.0	41.0	4.0	0.02
292 19	砂	SD004	—	—	—	打抜石路 石漠	—	中少	57.0	58.0	20.0	0.03
293 19	砂	SD004	—	—	—	打抜石路 石漠	—	中少	53.0	26.0	7.0	0.07

写 真 図 版

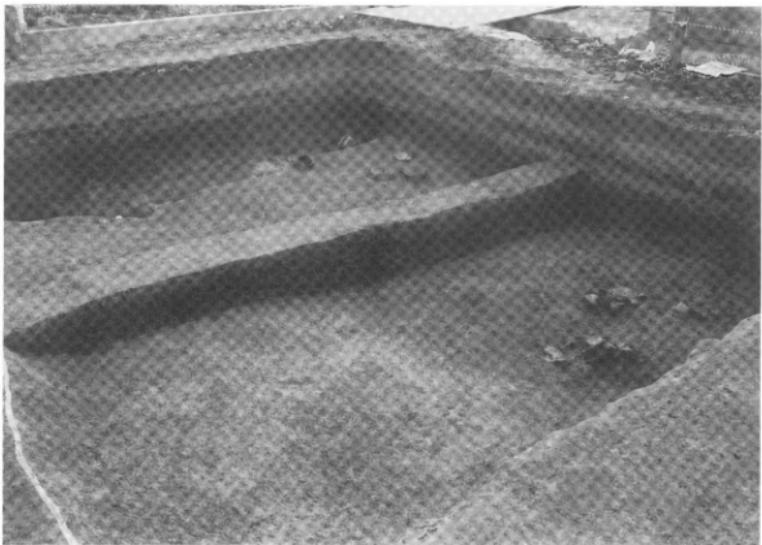


①調査区遠景（東より）

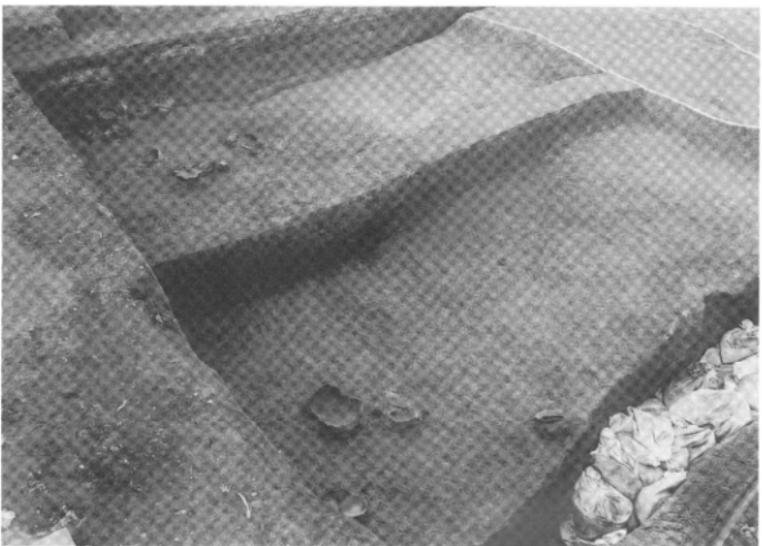


②調査区近景（南東より）

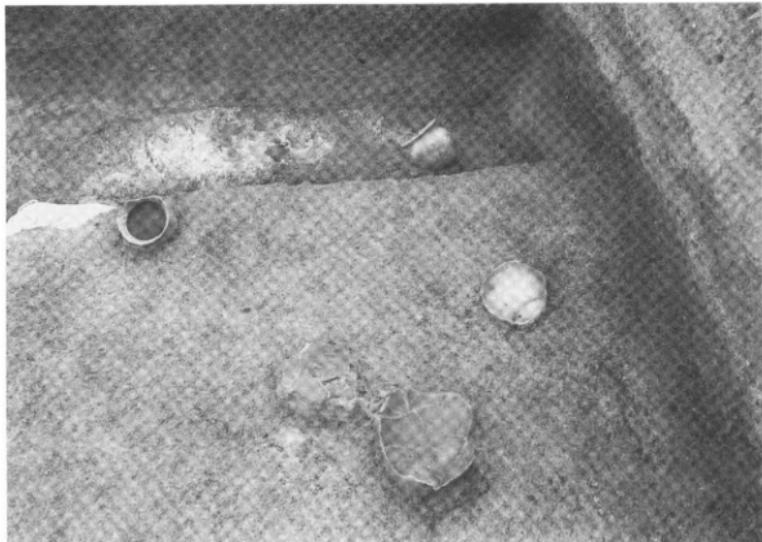
図版2



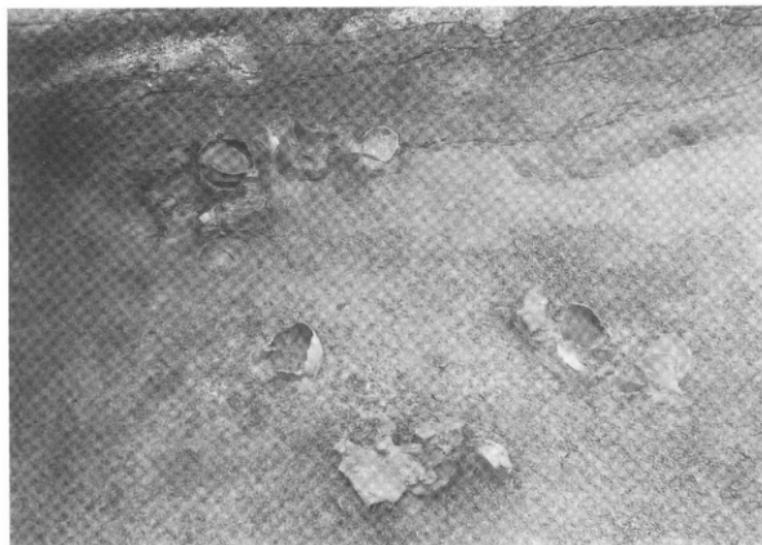
①第Ⅰ調査区 SD02遺物出土状況(北西より)



②第Ⅰ調査区 SD02遺物出土状況(南東より)



①第Ⅰ調査区 SD02遺物出土状況拡大(北西より)



②第Ⅰ調査区 SD02遺物出土状況拡大(東より)

図版4



①第I調査区 第1遺構面完掘状況(南より)



②第I調査区 第1遺構面完掘状況(北より)



①第Ⅰ調査区 東壁土層(北西より)

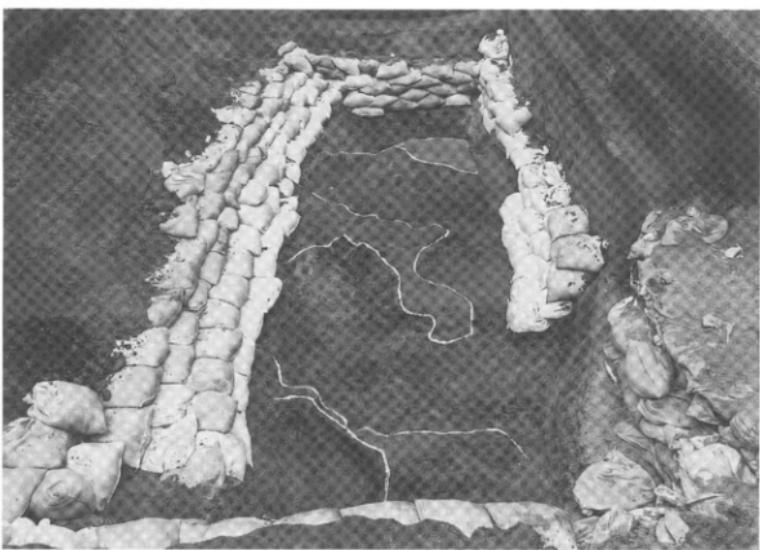


②第Ⅰ調査区 南壁土層(北より)

図版 6



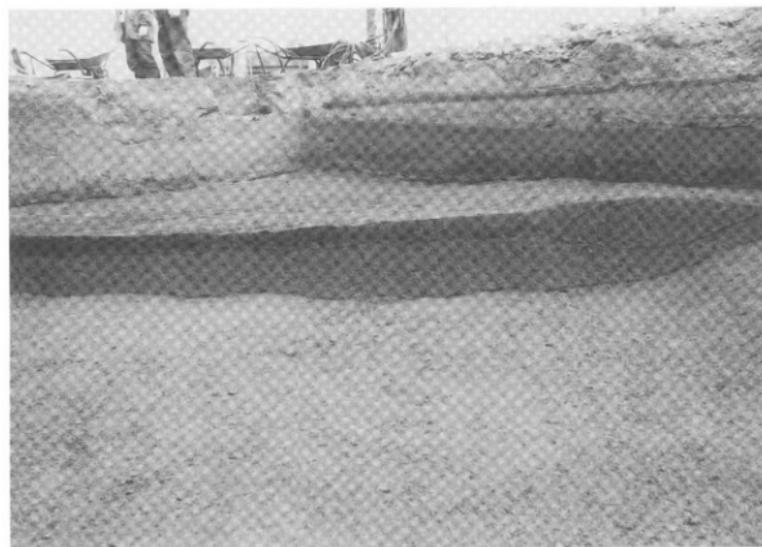
①第 I 調査区 西壁土層(東より)



②第 I 調査区 第2造構面完掘状況(南より)



①第II-1調査区 第1遺構面完掘状況(南より)



②第II-2調査区 SD04土層断面(南西より)

図版8



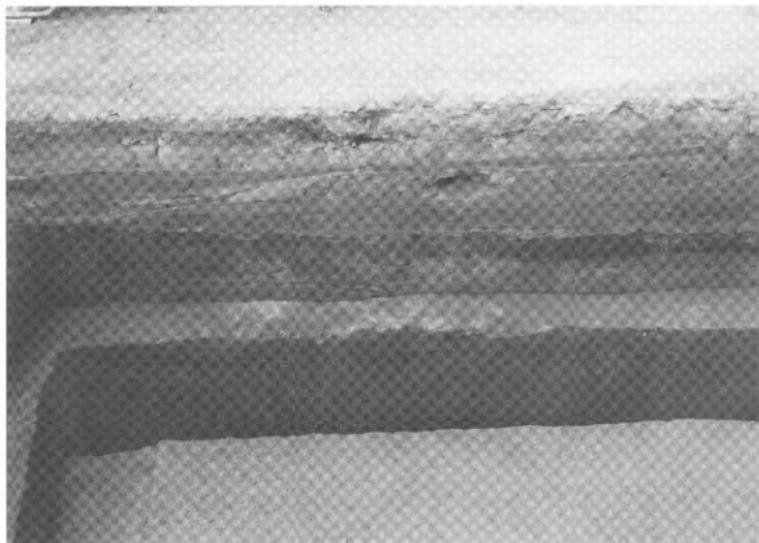
①第II-2調査区 第1遺構面完掘状況(北より)



②第II-2調査区 第1遺構面完掘状況(南より)

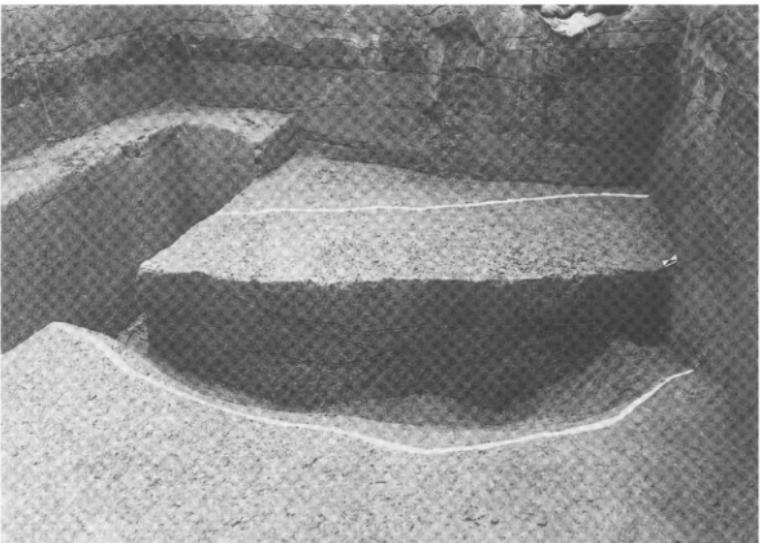


①第Ⅱ-2調査区 東壁土層(南西より)



②第Ⅱ-2調査区 西壁土層(東より)

図版10



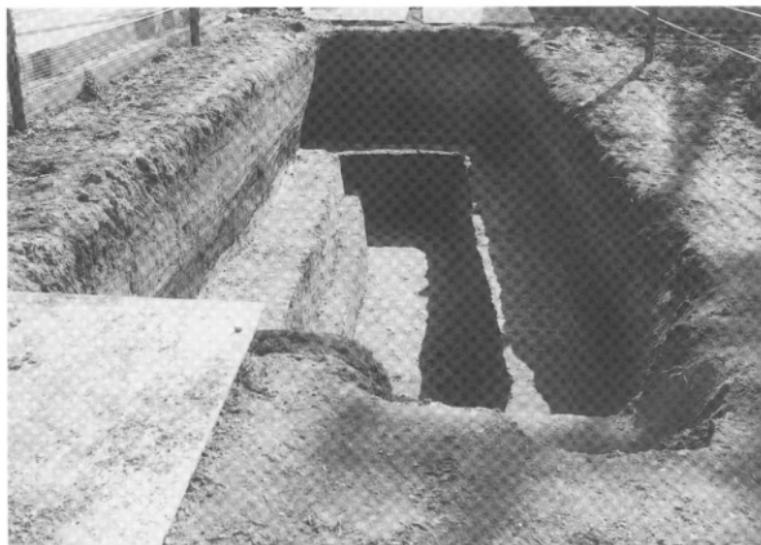
①第Ⅱ-2調査区 SK02土層断面(南より)



②第Ⅱ-2調査区 SK02完掘状況(北西より)

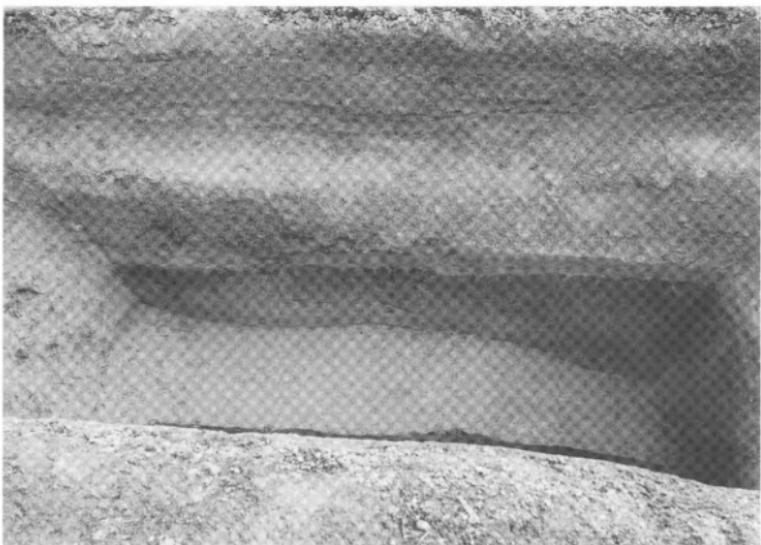


①第Ⅲ調査区 東壁土層断面(北西より)

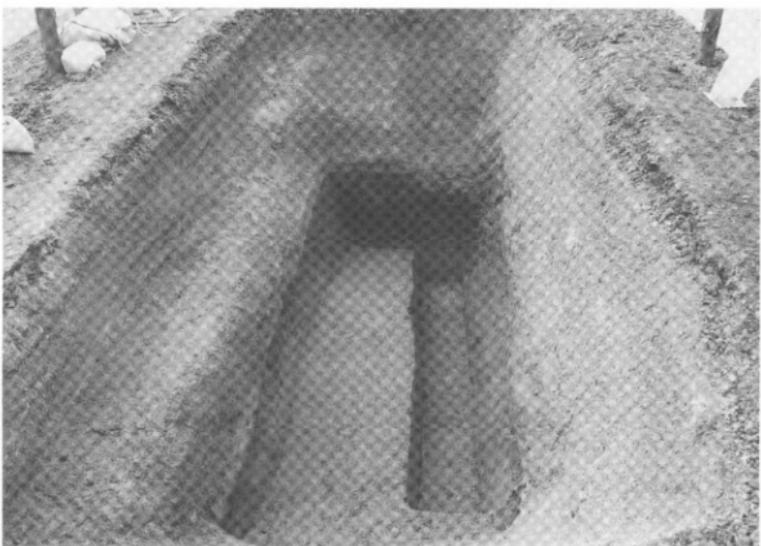


②第Ⅲ調査区 完掘状況(北より)

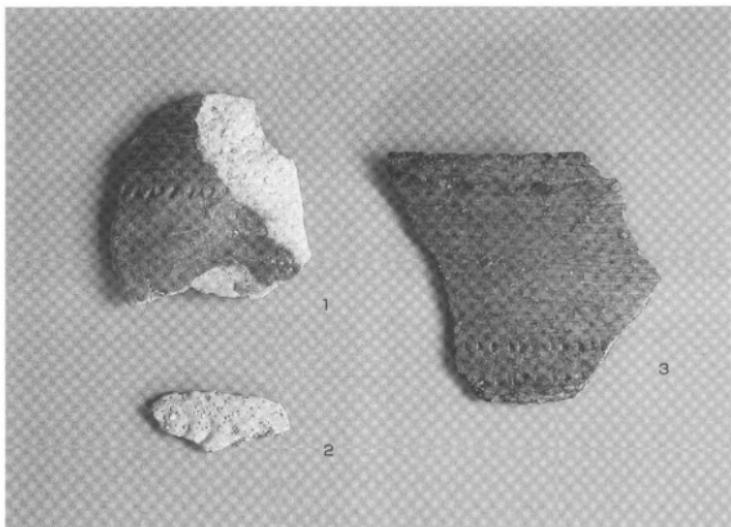
図版12



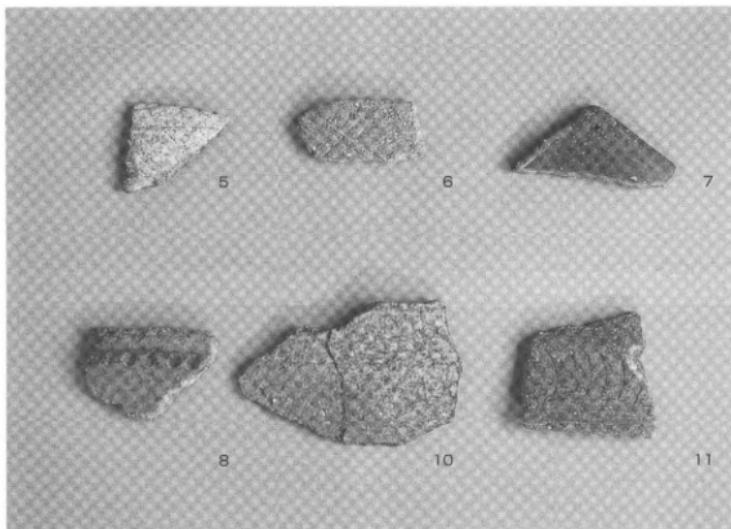
①第IV調査区 東壁土層(西より)



②第IV調査区 完掘状況(北より)

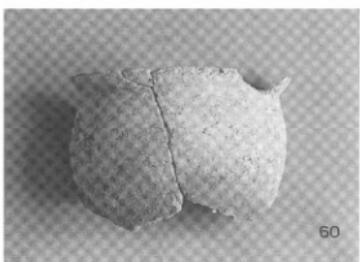
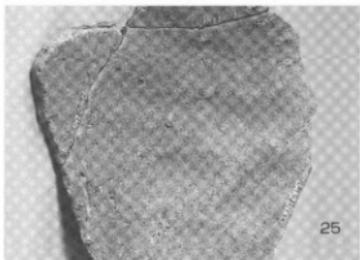
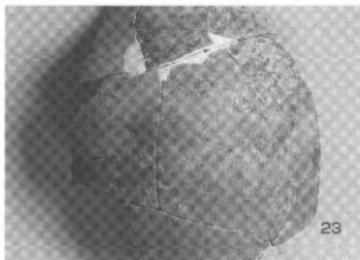


①SR01 出土遺物



②SR02・03 出土遺物

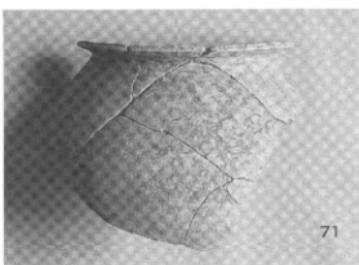
圖版14



SD01·02 出土遺物



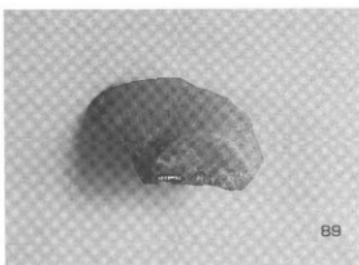
61



71



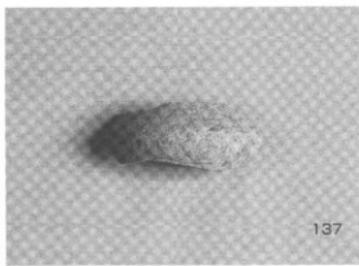
77



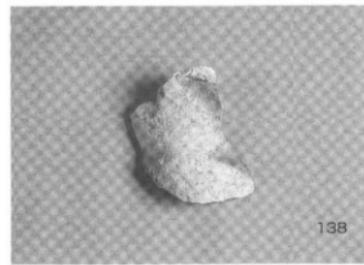
89



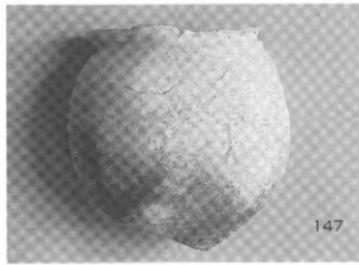
94



137



138



147